川柳雑誌

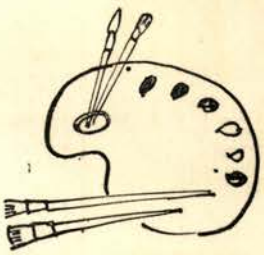
Pensoj flugas trans la land-limon

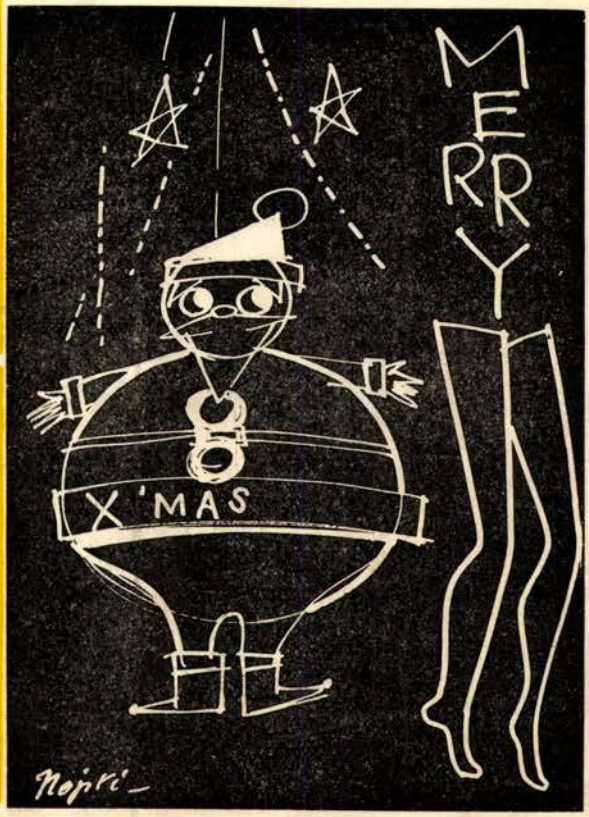
THE SENRYU ZASSHI

麻生路郎☆主宰

昭和廿三年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿一年十二月一日発行第十一巻第十二号（毎月一回一日発行）
創刊大正十三年・通巻三百五十五号

No. 355





十二月号

忘年川柳大會

主催 川柳雑誌社

本社恒例の師走川柳大会を左記プロによって賑々しく開催致します。一年の労苦を吹き飛ばし・楽しい朗かな句会を持ちたいと一同張り切って居ります。日頃忙しくて出席出来なかった人たちも今回は忘年川柳大会のことでもあり柳友を誘い合せ特に御参会下さい。

日時 十二月九日（日）午後一時

会場 光明寺 大阪市天王寺区下寺町二丁目バス停前

司会者 黒川紫香

挨拶 北川春巣

兼題 「恐縮」（二句） 麻生路郎選

「網棚」（三句） 中島生々庵選

「みそ汁」（三句） 市場没食子選

席題 三題（題および選者は当日発表）

柳話 麻生路郎

支部対抗句戦 各支部選手

雪月花句戦 出席者全員

呈賞 ★各題天・地・人・五客、★路郎選天位に不朽洞賞
★支部対抗句戦優勝者、準優勝者及雪月花句戦一位の組に川雑賞

余興・記念撮影

会費 六十円、（投句のみの方は十二月七日着便、三十円切手同封本社宛）

幹事 紫香・いさむ・小松園・多久志・賀峰・一瓢・潮花・摩天郎・白柳子・文蝶・水客・水堂・貴山・白水・凡九郎・淡舟・博也・梅里・竹荘・十悟

★忘年懇親小宴——閉会後、同会場に於て 会費三百円

川柳不朽洞会会員句集

路郎選集

私達

定価三百五十円
送費 三十二円
菊半型・函入

本書は限定出版故この機を逸したら再び手に入らぬもの
予定数に達し次第〆切りますから即刻申込まれたい。

本句集は 歴史的存在を誇る川柳不朽洞会に於て今回会員諸氏の名吟佳什を蒐め、我等の恩師麻生路郎先生の精選を請い、その真価を弘く世に問うことは寔に意義深いものと信ずる。作品は「川柳塔」「近作柳樽」其他から各自二〇〇句以下を自選して選出、多忙な路郎先生が一年有半を費して慎重に厳選の労をとられたもので、川柳不朽洞会員至上作品とも云うべきものである。

本句集は会員各自にとって至宝であると共に、柳友諸賢にとっても亦柳界稀に見る絢爛多彩な句集として大いに渇を[illegible]いただけ[illegible]を確[illegible]。

★出版予定日・昭和三十一年十二月中旬、五〇〇部限定出版につき御申込は早く★御送金は川柳雑誌社の振替口座大阪七五〇五〇番を御利用が便利です（切手代用可）

発行者 川柳不朽洞会 句集「私達」刊行会
委員長 北川春巣
大阪市住吉区万代西五の二五

発行所 川柳雑誌社
電話住吉（67）六〇八一 振替口座大阪七五〇五〇番

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも 心にくい贈物かと存じます

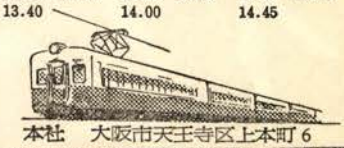
一〇〇円から一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四条
高島屋

大阪・名古屋・伊勢を結ぶ…
近鉄特急
座席指定・ノンストップ

大阪—名古屋 2時間42分
大阪—宇治山田 1時間58分
名古屋—宇治山田 1時間38分

大阪上六発		名古屋発		宇治山田発	
7.40	15.40	8.00	16.00	8.45	16.45
8.40	17.40	9.00	18.00	9.45	18.45
11.40	19.40	12.00	20.00	12.45	20.45
13.40		14.00		14.45	



本社 大阪市天王寺区上本町6
近畿日本鉄道

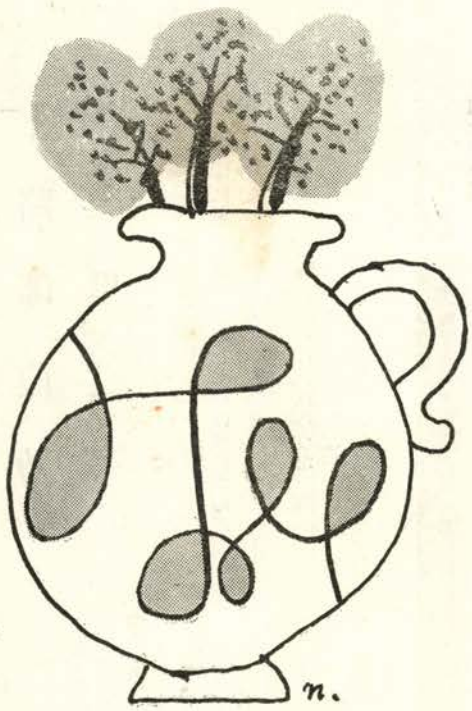
歳末の言葉

又十二月が来た。十二月は三百六十五日すると又来るであろうが、私にとっては、もう何回来るかが問題である。十二月が何回来るかということは今後私の手で十二月号が何冊出るかということである。いつもの月はシャニムニに出しているが十二月になると妙にこんなことを考えさされるのも一年の締めくくりの月だからであろう。

一九五六年という年も、私にとっては、かなり多事多端であった。なるべく、川柳以外の役員は避けて来たが、私の持論と合致する様な会や川柳と密接な関連を持つ会の役員はうけない訳にいかぬので、大阪・ゆう・もあくらぶの理事に引っぱり出されたり、関西短詩文学連盟の理事長をさされたり、大阪市の文化賞の選考委員を依嘱さされたりした。これも曾て、川柳の社会化運動に専念して来た私として当然担わなければならない仕事かも知れない。私の健康がゆるすかぎりは微力を尽したいと思っている。

こんな仕事は何んと云っても、柳人諸氏の協力がないと出来ないことなので歳末に際し特にお願いして筆を擱く。

（路郎）



12月号目次

題字……麻生路郎
表紙……野尻弘
歳末の言葉……麻生路郎…(三)
川柳家の二十四時
安川久留美・金泉萬楽…(一四)
西尾栞……菊沢小松園…(一五)
選者に云う……東野大八…(一三)
庭の秋草……須崎豆秋…(一九)
一万円今昔感……尼ヶ崎絲之助…(二六)
山陰川柳大会……麻生路郎…(一二)
新川柳鑑賞……戸田古方…(一六)
幸福を幸福に……路郎・葭乃…(四)
潮花を語る……梨里・良子…(四)
川柳の綠風会的考察……八杉風車…(三〇)
あゝ秋香……木村十悟…(二九)
川柳一万円札……諸家…(二三)
鰻のきも……松江梅里…(三〇)
あすなろの歌……久保和友…(三一)
風吹けば麦稈が腐る……高木渋柿…(三一)
押売りに御用心……国弘半休…(二七)
ストーブリーグ……不二田一三夫…(二七)
大阪市民川柳大会入賞句……(二五)
四者会談……(五)
青ペン赤ペン……(二一)
菊入形協賛川柳入賞句……(二五)
川柳塔★……麻生路郎選…(六)
同舟近詠……諸家…(一一)
近作柳樽……麻生路郎選…(一六)
北川春巣選…(一六)
一路集「名門」「銀行」……川村好郎選…(三三)／若本多久志選…(三三)
金泥集……麻生葭乃選…(三五)
各地柳壇……(三三)
川柳第二教室
作句指導……戸田古方…(二八)
不朽洞会から……(二四)
柳界展望……(二四)
公私雑記……(二八)

潮花を語る

―達人る語―

路郎・葭乃
梨里・良子

葭「永い間女流作家のため、色々とお骨折り下さった潮花さんについて語る会を開くことにいたしました。潮花さんとはどんな方かということを広く知っていただきたいからです。先ず、潮花さんの性格について、どなたかに話して頂きましょう」

路「そうだなァ、潮花君は川雑婦人友の会の肝入役として、女流作家のインタービューをやったのと、雅号が潮花と云うやさしい名だから女と間違えられて、女の方から同性へ宛てたような手紙を貰ったりするので、奥さんを心配させたりする事があるといった男だ。」

良「それだから、潮花さんはやめられないのですわ」（笑）

路「性格は確かにWが勝っているが、世の常のWと違って手八丁、口八丁、足八丁である。非常に小柄で、食事なども極小量しか摂らない。然し甘いものは相当いける。日立造船のような所に勤めていて、川柳もやれば舞踊もやる。一寸普通人が想像も出来ない活動家である。非常に女性的であるかと思えば親分肌のところがあるのでみんながついて来る。考えると矛盾した性格の持主の様に思える。話術も相当巧みなので、直ぐ、誰もが十年の知己のようになって終うといった風な人間なのだ。」

葭「此間、婦人友の会の小集句会へ出席された娘さんですが、早くからお母さんを亡くせられた方ですので、初めは、潮花さんをほんとうのお母さんのような気持になって手紙を書いて出していられたのだそうです。それで、男の方だとわかった時はきまりが悪るかったと云うていられました」

良「そんなら、潮花さんからは何も御返事がなかったんですか」

葭「勿論、潮花さんは筆まめな人だから、手紙は日に何通来ても、一人一人に永い返事を出していられますが、潮花さんの手紙の内容は句の批評であったり、句会への勧誘であったりして、その書振りも女と思えるような構文なんですよ。だからそう思われたのも無理はありません」

良「潮花さんは自分が女であると思われていることを知っていられるのでしょうか」

葭「さあ、それは潮花さんに聞い見ないから、わからないけれど……」

路「知らないだろうな、潮花君は自分が女性の様な手紙を書く事すら意識していないだろう。普通の男だったら簡単に書く所の様に可なり親切に書いてある。然し決して色っぽい手紙ではない。親切に、細々と書くと云う事が、何処となく女性が書く手紙と似通っているのだ。会社から帰って夕食がすむと寝るまで手紙の返事を書く。勿論内容は川柳の句の添則などである。

清元「夕立」を踊る潮花氏

葭「潮花さんは自分が女性的であると意識していない様に女の人に話をしても、又手紙を出しても、相手が女であると云う事も、特に人の様に意識していられないところがあるのです」

良「そう云うところが潮花さんのいゝところですわ」

梨「手紙も女性的だけど、実際会っても、女の人にあまり異性らしい感じを与えない人ですね」

葭「其事は奥さんの花代子さんも潮花さんによく云ってられました『あんたは男女両性に作用するオバホルモンのような人だ』って」

良「私、潮花さんのおこりなさった顔を見た事がありません。いつか、インタービューに来られた時も、ニコ〳〵と少女のような可愛らしいお顔で受け答えをして下さいました」

梨「ほんとに、そうですわ。永いおつきあいですけど、こわいお顔は見たことがありませんね」

葭「夕飯がすむと、直ぐ机で手紙を書くと云う意味の句が花代子さんにありましたが、潮花さんはその通り、会社から帰ると夜の十二時過ぎ、一時頃まで地方から来た手紙の返事を書くので、毎日何通かの手紙の来ぬ日はないのですから、少々所が違っていても着くのだそうです。潮花さんの毎日の日課が花代子さんの句材になるところも面白いじゃありませんか」

路「女性との交通が多いので、時には誤解されることもあるが、梨里がおつきあいしても異性と感じない様に、潮花君も女性とつき合っていても、異性と感じていないところがある。世間ではそう考えない性格の持主もいるので、そんな場合には誤解され易いのである。それは世話好きということも其原因の一つになる場合があるように思う。話題も沢山持ってる男で、話振りに何となくユーモラスな所があって、人を飽かさない。例をあげると、潮花君が電車の停留所で車を待っていたら「一寸」と肩を叩く人があるので、見ると、知らぬおばさんが立っている。妙な顔をしていると「あんた此を、可なり細々と書いている。そういう点が、自然に相手方には女性が書いた手紙の様に受取れるのだ。丁度女親が息子に書く手紙とか、又愛人に書く手紙

頃どないしてんのや」という。「おばさん誰やねん」と訊返すと「うどん屋にいてたやないかいな、此頃気楽になってるのや、一遍遊びにおいでえな」となれ〳〵しく云う。うどん屋は何軒でもある事だし、そんな古いことは覚えている人もないから先方が云えばそうかと思う。それへつけ込んで、おばさんは「たばこ一本おくれえな」とあっさり云う。煙草位まあ、えゝわと思って、新らのピースの袋を破って一本やると「すまんなあ、もう一本おくれんか」と、又一本せしめて行ったと云う話を、会話のやりとりも潮花一流の調子で話して聞かせるのだ」（笑）

葭「潮花さんはいつ来られても、同じ話を人に聞かせた事がありませんが、何でもない事でも、ヂェスチュアがうまいのか、声を立てゝ笑わされるのです。次に潮花さんの作品ですが、潮花さんが川柳の近作欄へ投句し出したのは昭和十三年の八月号あたりからだと思います。其時分はまだ二句組でしたが、初期の作品に「売られ行く西瓜車の座にころげ」と云うのがあります。初心の句としてはうますぎますが、まだ潮花さんのカラーは出ていませんでした。潮花さんの初期から中期にかけては、句会部幹事の花形で、お茶も汲むし、句箋もあつめるし、忙しい中で席題も作って、いつも三才に這入る。相撲吟では優勝もするので「潮花君には勝てんなあ」と皆に感心されていました」

路「無茶苦茶にセンチな句ではないが、ローマン派だったね」

梨「最近の句は少し変って来てますが、戦前はどちらかと云えば、感傷的なところが多分にあったと思います」

葭「やっぱりお齢のせいですかな」

梨「そうね、もう程なく停年だから」

路「小柄だから若う見えるが、非常に忙しくて、髭も剃らずに来た時は年だけに見えることもあるよ」

葭「男の方からも、万年青年だと云われていられますが、精神年齢も万年青年だと私は思ってまして、昭和二十二年の夏頃から廿七年の三月頃までは竹内と云う御本名を使って、川柳塔へ句を投句していられましたが、昭和廿七年の四月号から再びペンネームの丸尾で発表されています。最近の句には、

意地張った肩へ蛇の目をきせられる
み七日へ祭ばやしが聞えて来
風鈴は師匠が吊った位置のまま
しおり戸を開けたら萩がこぼれそう

などがあります。極く初歩の時代の句は別として、潮花風のカラーが見え出してからは、此人の句はいつも艶っぽいスケッチか抒情的なものが多いのです。此人から知性の句や批判的なものを探そうとしても見つかり難いのです。強いてピックアップすれば、

食うためのハンドル又も人を轢き
茶立ちする程の人でもなかったが
位のところでしょうか、少し昔の句ですが「封筒も二十才の頃を捨てぬ色」などは明らかに其万年青年振りを発揮していて
手をひけば影もあまえている月夜
君とゆくプランの中の伊豆熱海
何処へゆく水かつつじの色をのせ

など何となく女性の匂いのする句だと思うのです」

梨「句もそうですけど、好みもそうなんです。戦前だったか、何処かへ行かれた時の御土産に花瓶を頂いたのですが、それがやさしい模様で十七八の女学生からのプレゼントみたいなのですよ」（笑）

葭「あの花瓶は私も覚えてますが、あれを頂いた時はほんとに潮花さんのセックスを疑いました。それ位印象的でしたわ」（笑）

良「然し、私たちの想像以上の努力家ですね」

葭「あゝ云う努力家が四五人もよれば大概のことは成功するでしょう。もうスペースもないと思いますからこれでエンドにいたします。皆さまありがとうございました」（葭乃筆記）

カットは丸尾潮花氏

☆　☆　☆

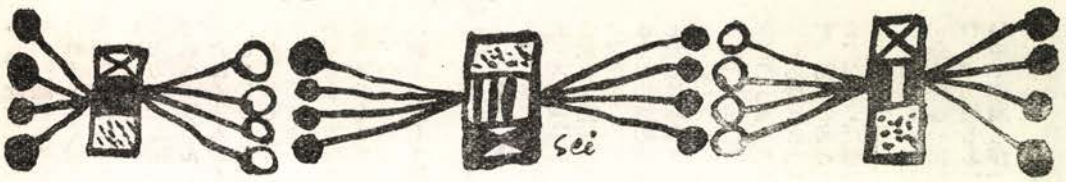
四者会談

—座談会寸筆—

麻雀のそれよろしく机を四方から囲んで「潮花を語る」が始まる。カットされるような特種記事のないことも潮花氏のお人柄であろう。男性も女性もついてくるというのも世話好きと親分肌の持主であるからであろうが、おそらくこの人に敵というのがないであろう。手八丁、足八丁、人気八丁ではある。葭乃先生が筆記するのを忘れて喋べりつゞけられると、そこは梨里若夫人手なれたもの、素早くペンを執って、かっての名筆記ぶりを示される。

愛弟子を裸にする路郎先生、柳友の熱をたゝえる太田良子女史、四者会談ます〳〵熱をおびてくるので、二頁位いではおさまりそうもない雲行に、編集子実のところビクビクものだったが、そこはそれ、葭乃先生の名司会にソツはなく、これこのとおり本年のサヨナラ、タイムリーとなる。（F）

常盤津「三ツ面子守」を踊る潮花氏



大阪市　西尾　栞

病妻と別れる握手他人めき
習いたての手品は妻にして見せる

大阪市　市場没食子

住宅が当り別居の荷をまとめ
食うだけがやっとのくせに出癖つき
アルサロで持ってたネストン皆とられ
兄弟の呑まぬ浮気と呑む浮気

出雲にて

釜上げに割子に出雲よいところ
宍道湖の長さ車窓へ顔をむけ

芦屋市　寺井　鋭々

フリュートが聞えて来そうな月をほめ
云い勝った女一層さびしくて
明日の心配持たずに猫は眠るなり
人が預ける金の嵩ふと嫉ましく
地図書いてくれたが訪問する気なく
退職を訪えば悠々菊作り

ホノルル市　内藤草一郎

作戦をネクタイ結びながら練り
移民史の頁を枯れる如く閉じ
鼻につきや紅の濃ゆさも暑苦し
別宅は敷かれる褥さの捨てどころ
泣き止んだばかりと思やコンパクト
艶のない靴から恋が遠ざかり
心浮き〳〵雨の音にもあるリズム
屋上でお待ちしますとビルの恋
借金も出来ぬに大きな事を云い

東京都　宮田不二

一日の始まり瓦斯へ点火する
季節とは争えぬもの蚊も無沙汰
何気なく殺し何気なく逮捕され
花電車の運転停年近い人
一夏を相勤め候金魚死に

大阪府　川村好郎

朝刊をはさんだまゝで呑み屋昼
よう効きますと薬局禿げており
うっかりと女将の方が惚れかゝり
出棺を待つ横丁の笑い声

大阪市　正本水客

太陽族おとなのしたいことをする
機会があれば浮気をしたい顔並ぶ
お茶ひとつ女ひとりの部屋と知り

結婚式に

八雲立つ式場の椅子そろて鳴る
体温計借りに新婚走ってき

大阪市　丸尾潮花

ビール瓶庭にころんだまゝで秋
呼び出して逢うて泣かせただけのこと

大阪市　北川春巣

唯一の見舞は食べる話なり
交叉点女案外あわてもの
退院の聖書どこかへ置き忘れ
原爆時代ふぐはやっぱり敬遠し
えゝ天気やなァ以後は話題のない男
台風一過家の古きはすぐ忘れ

奈良県　尾崎方正

ヒヤリング詰ったとこで筋が切れ
行きずりに史蹟教わるハイキング
名物は腹へ入れてるハイキング
周章てない視ない聴かない余程老い
死ぬ齢になって洋行とは淋し

下関市　桜川不水

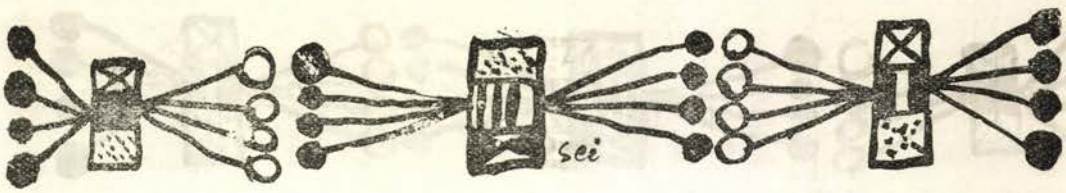
こんにゃくの様な男に出しぬかれ
血を求む生きんが為の蚊なりけり
航程三千里小酒屋程に積んで航く
ベンガルの夕陽と飲んで詩人めき

岡山県　浜田久米雄

秋の陽に牛も牛追う人も溶け
なんのこと風邪かと聞けば入歯中
総入歯もう一二年一二年

大阪市　菊沢小松園

電気洗濯機買うても女房本読まず
御互に弱味に触れず話好き



自分だけ分る帳簿で急に逝き
岡山県　逸見灯竿

近道がスエズにあってもめにもめ
地教委へ石部金吉押されて出
お女中はコスモスだけの見える部屋
引越しへ男何んでも捨てゝ行き
名物は買ったが駅へ置き忘れ
大阪市　武部香林

盃へ月は冷たきものと知り
町内の古顔葬式ばかり行き
天王寺引導鐘に上中下
鼻声に勝てず百万契約し
パンの問題よと未亡人美しゝ
孝行の仕納め医者を連れてゆき
出雲市　尼緑之助

秋ばれへこうしておれぬ宿酔
御近所のゴタ〳〵秋の夜は長し
大阪市　水谷竹荘

もてるはず馴染の仲居いてくれて
眼で叱る事に師匠はなれている
ある日ふとお里の様な妻がほし
別れたら死ぬと純情おどかされ
自惚れていたらあっさり捨てられた
エキストラ富士のすそ野へ集められ
富士野鞍馬氏へ

祝盃を手に還暦の富士を書き
広島市　国弘半休

長男がまゝ子で次男我まゝな
時々は父が来ますと云う別居
境内のあひるでさえがアベックか
どっちでも良いのに僕にアンケート
自転車の向うもベルをして曲り
野心作波紋と共に売れて居り
太陽族すばりと云ってさげすまれ
「堪忍してね」と接吻を拒絶する
西宮市　小沢史葉

奥様はお留守ざあますと女中まで
半農半漁お墓はみんな海を向き
酒女許しお寺もアルバイト
兵庫県　小西無鬼

ちっぽけな腹芸頭下げさす気
待ってまっせ甘い言葉にひっかゝり
受取も書けぬ店主でよくはやり
出雲大会参加

愼太郎刈りが夜汽車の前に座し
正直に坂へ汽関車あえぐなり
あばらやもよいなと思う旅帰り
京都府　大鶴喜由

十月の水は冷たし快し
若い娘と踊れば春がまた来そう
母の気の知らせたくない性知識
まあ上れまあ呑め借りる気がにぶり
尼崎市　小林文月

デートにはちと嵩高い荷物提げ
デートする気かチョコレートなどを買い
デート前なるに課長の用が出来
奈良県　飯降白香

古傘一つ側にのこして女死に
埃だらけの雨でもネオンは艶をもち
山口県　長野井蛙

向う持ちと知ってどっかり腰を据え
べた惚れの弱味へ襟脚見せてすね
ライバルに最後は金で押し切られ
うぶなとこに妓商売気を離れ
高い酒のまれた上に惚気られ
京都府　間島青丹子

入院

病人のように見舞の方が痞せ
腰板の楽書だけが人臭し
ルンペンの気楽さがふとわかりそう
落書に手術気にしてたらしい文字
花持って来た娘へ照れている若さ
玉子割る手付も馴れた日々に明け
岡山県　直原七面山

泣くな虫僕も淋しい旅役者
砂文字で告白なんて純情な
瑪瑙細工の様にきれいな雨蛙
悪口を云うててバスに乗り遅れ
酒供養みんな一升口に見え
秋だなあと金を持たない者同志
人の気も知らで別居を迫る医者

母一人子一人今日も秋刀魚にす

中学生のデート千円札を持ち

堂々と戦いました負けました

子が無いからと転勤押しつける

マネキン嬢家では我流の化粧をし

名月のまだ出ぬ中に酒がすみ

大阪市　西森花村

浮き沈みまだピリオドは打ってなし

浮き沈みあまりに人の老い易く

鳥取市　河村日満

本年の役得名所にも泊まれ

テナモンヤないかの唄へ俺も和し

岩風呂へ今日も庄助さんとなり

人生意気に感ぜぬ一人取り残し

カチューシャの唄も知ってるおない年

温泉の街で世間は狭い人に会い

酔うた妓と二人たのしいローレライ

岡山県　福島鉄児

殺す程惚れていたとはつゆ知らず

焼香場腹には別な手を合せ

岡山市　服部十九平

幸運は乗りそこなったバスが落ち

米寿なお夜這いの話をして達者

尼崎市　長谷川三司

色気抜きと云う六十のハイボール

なる様でならぬ浮世の眼鏡拭く

兵庫県　若林草右

奥さん奥さんと商魂のたくましき

手を洗う水をしたでは呑んでいる

大阪市　足立春雄

余技展に殿様芸も飾られる

熊本県　有働芳仙

枕辺に花の季節も一めぐり

書見器へ面と向ったまゝ眠り

大阪市　益永貞女

苦労して貯めて女に近寄らず

流行の服で歩いて気が疲れ

割切った結婚までのフレンドよ

既成道徳外れても仲のよい二人

広島県　山田季賛

お役所の人事新聞の隅に乗り

子のけんか父が口出しや静かなり

大阪市　山本葉光

賢夫人夫は馬鹿でないつもり

常識の判断冷た過ぎるなり

ほめ合って女同志が油断せず

頼まれもせぬのにスパイ引受けて

倉敷市　木村千容

老いを知り己を知って逆わず

オベッカをならべ履歴書置いて去に

お見それをして彼も老いわれも老い

石川県　那谷光郎

手の荒れの愚痴も互に多子家族

又禁酒ですかと妻の瞳が笑い

貯めたらしい小使チャチな店を出し

石川県　野村味平

夫婦とはかくもつれなき野辺送る

金すくでなぴかぬマダム気が強し

ドライブのそれから実話伏字なり

税務署で油とられてすぐ忘れ

実力で勝てす極め手を考える

大阪市　木村水堂

病んでても妻は気にする台所

理髪屋の手間が省けるほどに禿げ

高槻市　福田丁路

ボナンザグラムに阿呆らしくなってくしゃみする

敵ながら天晴れ裏の裏をかき

国の為思えばこそと逆コース

定年へ雄図空しくゴールイン

泥沼へ斬られて転ぶ役がつき

目と鼻の間で競う焼芋屋

天災に地変にこりす草が生え

倉敷市　水谷谷水

後家さんか二号か出前また聞かれ

気のもちようですわと借金苦にもせず

保険屋の同県人をもて余し

おだてゝも一本きりよと妻堅し

尊敬はしてるがあくまでライバルさ

御無沙汰はいゝが切手もはらすくれ

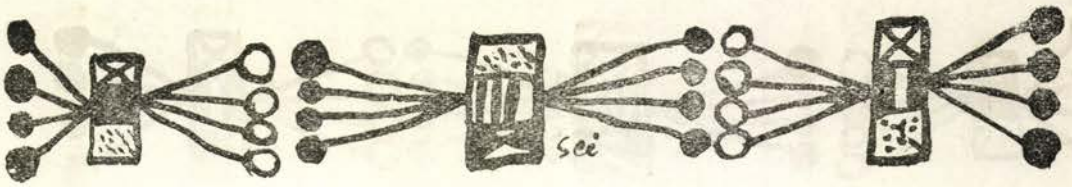
キスされた位いで女自惚れて

愛妻をいれなカメラでない如し

倉敷市　椙原一善

会合会合と主婦の役目を忘れてる

バックの力女将直き直きお出迎え



母さんの目はブランコに乗っており
岡山県　田村藤波

ありし日の城主を偲ぶ虫の声
負けて勝つ手もあったのに勝って悔い
岡山県　岡田夜潮

濡れタオル頭に温泉の町のどかなり
国の母味覚の秋を独占し
岡山県　本田恵二朗

テスト薬でも死ぬことを証拠だて
ど突くぞと云えばのろけのピッチ上げ
もらい風呂ついでに将棋へ坐り込み
馬鹿でっかい芥溜家号まで書いて
大阪市　真鍋一瓢

無為な日の朝昼晩へ米の飯
生やさしゅなれた磯馴れの松じゃない
空腹で居るを瓢々呼と見られ
落ちついて病んでも居れぬ借りがあり
人目をさけて貸せと脅迫じみて来る
お綺麗を後家は今更云われ出し
月だけが大きな夜の一心寺
長女就職試験パス
母の眼の届かぬとこへ立ち上り
京都市　松川杜的

蓮の露ローカル線の朝が明け
散髪屋日ソの事にも一寸触れ
紅葉青うてもデカンショよくはすみ
信心は地蔵尊にも傘をきせ
煙管乗り太陽族のいゝ度胸

カタコトと車窓で牛乳瓶がなり
こおろぎの声に命日思い出し
故郷は近し夜汽車の窓を拭く
果物屋今日から秋の店になり
秋はよし七草摘んでる母子連れ
鳥取市　森本法泉子

皆生にて
五十鈴に似し妓の衿の妻に似て
風呂敷も洗えば白くなるものを
税務署の小心お茶ものまず去に
大阪市　佐野白水

歩行さえバックミラーのいる都会
工場長の令息急逝
人間のもろさ交通事故で逝き
大阪市　後藤梅志

親分に食わしてもらうために掏り
空いた時だけはパチ〳〵くる切符
犯人は明星でゆくあほらしさ
いゝ機械買うたか予報当り出し
町会長追悼
どん栗のほうがのこった七回忌
倉敷市　藤井春日

恋かしら来るなら一人で来て欲しい
金亡と見たか女の体当り
案山子より雀が知ってる米の出来
また世話の焼ける小鳥を買うて来る
鮎よりも秋刀魚の味に満ち足れり
繕いも効かぬと医者にはねられた

抜擢の課長頭ばかり打ち
運勢にこだわり利運取逃し
呼鈴を押して姿勢を整える
岡山市　津田麦太楼

肩寄せて蟹酢をほぐす老妓ぶり
酔う程に管を巻かぬも淋しけれ
のらりくらり将棋の強い後家たらし
地酒でも鮎のうるかで一寸いけ
追っかけて呑みんさんなと女房言い
祭り月禁酒のことはもう云うな
商魂は汽車へ電報打たしたり
土瓶むしよばれまひようと三味を置き
三等車首の重さが身にこたえ
育学校壁の手摺れも哀れなり
六十五にもなって女房に叱られて
ミーもハーもおでこに乗せたサングラス
米子市　小西雄々

転落に憎い男があると云う
冷酷な男にみつぐ紅をぬり
嘘まぜた弔詞に遺族泣かされる
人間の屑とはいやな代名詞
出雲川柳大会にて
句を作る喜び妻に言い聞かせ
吹田市　橋本幸男

勤続二十年病院の庭を掃き
接吻のチャンスもなかったハイキング
肺一つで結構生きてる女事務
未だ独りですと女医さんわるびれず

堺市　高崎雄声

出勤を見送る頃が花なのよ
見るものみな詩になりそう秋の色
情死にも女化粧を忘れてず
御見合に槍一筋を持ち出され
ミナミから帰って友の訃報聞く
居眠りをしそうな顔の運転手
只今は幸福ですと未亡人
まとまらぬ話と決めて安う飲み
飲めぬのにオゴッて呉れるのにつゞき

西宮市　若本多久志

貞操を奪われたという顔でなし
仁王さんあぐらをかいてみとうなり
あり勝な過ちとして父無言
停年も間近い酒は悟っとり
紳士二人ぜんざい屋から出て来たり
年を経し女房姤くことさえ忘れ

岡山県　永松東岸子

失礼なことも尋ねるのが司会
集金に美人の二人連れが来る
此処も都か橋の下から煙立つ
雑魚のトト交りと思い靴をはく
ピンボケであったかその後沙汰もなし
役員会階下はねぎを洗って居
女同志スパイの役もたのみ合い
選挙でもなけりや公約さえもせず

倉敷市　野田素身郎

大阪市　吾郷玲人

むつかしい顔して袖の下を受け
好かれたいばかりに失敗談もやり
弁当の秋刀魚が通勤車に臭い
自分のことになれば縁談こそばゆし
柄になく見合の飯を食い残し
飲んで見て話せる奴だなあとわかり

大阪市　清水望峯

のり巻きがうまく切れると見て通り
姑をもうやり返す嫁になり

大阪市　木村十悟

口下手な奴ちゃと意中酌んでやり
下手糞を補う根をつめて居り
棚晒しみたいに守衛さんで老け
葬儀屋の仕事着と云うモーニング

大阪市　伊達堰子

当違いでしたと移民戻るらし
ネオンの灯映れば泥川とも見えず

大阪市　不二田一三夫

税務署で誘導尋問にひっかゝり
黒髪の乱るゝおもいとはもう書かず
芦屋でも質屋の看板こゝかしこ
拾い屋にやれば礼より先きに嗅ぎ
戦災と云うことにして二階借り
にらんでも乙女十九は美しい
まさかと思うた麗人の飲みっぷり
水臭いほうが旨いとかぼてやり
真夜中に書くことだけが作家に似
誤植のまんま育ったような僕

兵庫県　酒井ひか平

お化粧をする間に変る空模様
神輿かき歳で頼みに来て呉れず
郷愁は一つ握った丹波栗
古丹波に尖った心静められ
いよう奥様今日は和服でと八百屋
記念碑を拝借彼女写しとき
柳行李一つ離婚も早からん
二つ三つ栗を拾って峠越え
一石を打って眺める菊の花
空向いてラムネを飲んだ日本晴れ
運動会ママサッソウとダンスする
薄給と知れる重たい靴を履き

大阪府　深見雅堂

来賓も顔の売れてる順に坐し
お見合の時だけ眼鏡外しとき

宇部市　津秋六花

どなたでしたかなあと相手も老けて居り
凶作のあとへ案山子がほっとかれ

神戸市　野村初甫

他人でも後継が気になるお葬式
そばとうどんこゝでも夫婦気が合わず

大阪市　金井文秋

運勢はよいと暦になだめられ

岡山県　戸田喜楽

お二階のミシン天井裏でなり
泥足を洗えば月が砕け散り

唐津市　新岡回天子

写真狂助ける暇より先ず写し
岡山県　池田古心

釣竿を見物人が占領し
おやすみと布団を叩き女去り
東京都　石居高志

只の酒ちっともうまくなく帰り
金故と云われたくない気の配り
戸倉温泉にて

挨拶はどちらでもいゝ燗がつき
アンコール〳〵と芸者に唄わされ
浴びる程飲んで千曲の風に立ち
岡山市　土井雷山

酔漢を車掌やんわり捌き馴れ
大阪府　早川清生

二時間の飛行機二時間半も待ち
好きやなあと組合運動批判され
記事になる痴情案外醜女なり
漱石が読めず新仮名育ちなり
十代で戦勝祈る名前持ち
ヌードショウ一人で行けぬのも年か
運転手折詰一つあてがわれ
頼りにしてまっせと子に云われたり酔うていて
物持って行かぬを忘恩とも見られ
斉斎も継いだを養子気がつかず
小松市　伊藤茶仏

給仕から曜日をきいて飲む日取
老妻の鼾あたりを憚らず
堺市　辻圭水

神の試練にしては逆境長すぎる
結婚十年もう流行を追わぬなり
禿げるのと飲むのが親に似ています
石川県　中松恒雄

いゝ齢をしたイヤリングへうしろ指
妓から女房へつく嘘教えられ
専攻の法科を卒えてプロ選手
高知県　建沼康之介

押売りが聖書を出すも病院か
姪娠へ額を寄せるくらしむき
小遣を呉れる家内の手が荒れて
堕ろさせてお通夜だと云う酒を飲み
飲んだのを隠せぬ怪我をして戻り
滋賀県　中島可十

匂わせてまだ待たすのか小料理屋
妾宅で食べても飯の味は味
岡山県　野々口美舟

連れ子だと云われたくなく祖母と住む
くつろげる日もなく嫁のすこやかな

××同舟近詠××

ポケットマネーないが電車の復をくれ
金沢市　安川久留美

来て見れば観音様が利用され
自炊する煙の中に母の顔
松山市　前田伍健

鳩山さんある時喜劇役者とも
めくら判おしてお昼で帰る役
写真屋へこう修正と娘の度胸
リベートは席を替えてと酒にする
長野県　高峰柳児

本妻に田圃まかせて二号と居
末席の堅さえ姐さん飲んで見せ
蟷螂の闘志に孤独いどまれる
和歌山市　秋月宏方

幼な名で呼んでくれそう山川よ
この路地のどのゴミ箱もこぼれそう
大阪市　石田沐天

ポリも人間破廉恥もやってのけ
十二月アンタどうしてくれるのさ
八頭身寒さに勝てず着肥れる
今治市　長野文庫

百貨店試食するのにかしこまり
肉百匁持って来るのにスクーター
小手先の器用名人までゆかず
人質に子をとられてるPTA
うすのろが一役果すプラカード
真似をして見たい図抜けた汚職額
子の喧嘩影ふんだとか踏まぬとか
沖縄のたんすの中に日章旗
大洲市　米沢暁明

社宅街負けてはならぬ見栄を張り
幼稚園時計カチ〳〵生きている
陳情のみんなつけてる赤い羽根

新川柳鑑賞

麻生路郎

〔三三三〕

巻頭へ社長の俳句らしきモノ

（玲人）

会社の文化部から、雑誌が出る。厚生課長が、おそる〳〵社長室のドアをノックして、社長さんに何か一つお願いしたいのですがと云う。「よろしい」と安請合いはしたが、これと云う原稿が書ける筈もない。下手なことを書くと労組がうるさい。そこで、「これを載せてくれ給え」と渡されたのが、即ち「俳句らしきモノ」なのである。皮肉な穿ちの句で、「らしきモノ」が特によく利いている。

〔三三四〕

孫抱いて足は夕月出た方へ

（古方）

孫は子よりも可愛いそうである。それは子どもがおもちやを愛する感情に通じるものがあるように思える。おもちやは飽きたらポイと投げ出されてかえりみられない。赤ン坊を抱いたおじいさんも「オイ、おしっこをしたよ」と云うて嫁の手へ渡してしまう。この句おじいさんらしい愛情も出ているし、詩情も豊かである。

〔三三五〕

おまわりさんを若いと思う程に老け

（不二）

おまわりさんが立っている。学校を出たばかりの若者にしか見えない。若いなア、あんな若さで、巡査の仕事が出来るかしらと思ったのである。ただそれだけである。ただそれだけであるが、この句からは巡査よりも、むしろ老人の心のうごきがハッキリとうけとれるところに興味がある。

〔三三六〕

ユアマザーと佗しき嫁の言葉なり

（北海）

家庭の複雑さを巧みに表現した句である。この嫁は所謂アプレ派の嫁であろう。自分の夫の母なら、自分にとっても母である筈だが、ユアマザー即ち、あなたのお母さんでしょう、わたしの知ったことではありませんわと、家庭のもつれに際して、母即ち姑に対しての親しみを少しも持ち合さないのである。この句の場合、夫に対して、ユアマザーの語の痛烈な反撃は姑としては実に佗びしい言葉となって響いたのである。

〔三三七〕

背丈だけ伸びてるように母思い

（茶仏）

着物を着換えさすたんびに、足がニュッと出る。「この子は、まア」である。

母と並んで、買物に行く。母の背よりもズッと高い。「この子は、まア」である。母にして見れば、背丈だけが伸びてるように思っているのであろう。斯ういう母親には、うちの子はいつまでも子どもなのである。軽い穿ちの句。

〔三三八〕

読みもせぬくせに読書の秋ですな

（晃）

「二科展を御覧になりましたか」

ロクに画の判らぬくせに、こんなことをいう人がある。こどもの漫画本を横取りして読む位がせいぐ〳〵なのに、「読書の秋ですなあ」という人がある。なか〳〵皮肉な句である。

〔三三九〕

立話長うて犬も坐り換え

（薫風子）

立話を詠んだ句もいろ〳〵あるが、これは又面白い観方の句である。

犬がキチンと坐って立話をしている飼主をジッと見上げているが、なか〳〵話が尽きそうもないので、とうとう坐り換えたというのである。

空もソロ〳〵曇って来そうだ。

〔三四〇〕

豪快に男同志はつぎこぼし

（ひか平）

「サア、一ついこう」と男同志は豪快についだのはいいが、つぎこぼしたというのである。ごく平易に詠まれているが、酒席の情景をまざ〳〵と見せてくれる点、スケッチの妙手である。

〔三四一〕

お燈明バーのマッチで点うました

（多久志）

お燈明と云えば昔からひうち石でカチ〳〵とやり、発火すると、先ず附け木に点火してそれから燈芯に移すか、ローソクに移したものである。近ごろは平気で、マッチで点火するようになったが、流石にバーのマッチと気付いて良心的にゆるされないものを感じたのである。

人間横丁 ㊹

庭の秋草

東野大八

一週間に一度一日中街へ出ない日がある。自宅から勤め先まで、汽車や電車を乗りついで約一時間半なので、その距離感が完全に私を田舎の人間にかえしてくれる。朝とび出したら夜おそくでないと御帰館遊ばされない亭主なので、朝から私が家にいるとなると女房も何かとモノがいゝたくなるとみえ、あれこれと次々と話しかけてくる。大ていそれが用事なので、時には参ってしまうことがある。風呂の水くみや下水の掃除、それから畑の仕事、トリ小屋の修理と雑用はいくらでもある。先日の休みなどイモ掘りまでやらされる破目になった。片手一本でツルを切り土を起すのだから相当応える。しかしムクムクした土の中から、赤い艶のいゝサツマイモがころころと転り出てくるのをみていると悪い気持ではない。一体これだけのイモを売ればいくらになるのか、と一服つけた煙草の中で一車分ほどのイモを眺めて思ったことだが、一貫目十二円だそうだ。そうするとそれだけで約五百円、すると一ときおでん屋でタコをあげるその勘定にも足らないのだと悟り、得るは難く散じるには早い金の小面憎さを考えた。

イモが終ると、その赤い革紐の様に光るツルを土中に埋めてあぜを作る、その端っこを踏んで麦まきである。

「御不自由なのに精が出ますね」

と通りがゝりの近所の人が声をかける。

「えゝ、片手間でさっぱりはかどりませんワ」

とこっちは答えて笑ってみせたりする。大根の黒ずむばかりの葉の色や、眼にしみるばかりの白菜の線が眼にしみるようだ。その向うの鼻先を、青くすんだ木曾川の水が冷たく流れている。時折そこにライン下りのへさきの長い舟が、パッと花の咲いたような紅いパラソルを二つ三つ乗せて下っていく。石原青竜刀氏が、いつか私の家へ来て、このライン下りの愉快さを話していられたが、こゝに住んで丸五年になるが、まだ一度もこの舟に乗ったことがない。曲り曲って犬山城の下まで、約五十分たらずで一舟二千円だそうだが、そんな金があれば飲んだ方がましだ、という解釈がすぐに出てすゝめられても乗る気にはなれないのである。

この川は、上流にダムがある。その少し下流に白い橋がある。はじめてこゝへきたときに、その橋を一度渡ってみたいものだと、夢の様に考えたものだが、それは見た分だけのことで、別にその橋を越えたからといって格別に新しい国が開けるはずのものではない。四国の私ののみ友達だったOが、帰省するとこの橋の話をよくしてきかせた。大変難工事だったらしいが、一度君の家へ行ってこの橋を眺めてみたいものだ、といってていたが、先日飲みすぎからあっけなく他界してしまった。川柳を習いたいとかいって、妙な句を高田の馬場の巻手紙ほど書いてきたことがあるが、これが愛媛県土木部長の知能程度か、と冷やかして送ったら、ありゃ一升のんで作る一方から書いただけのいわば戯作だ、と大まじめで言訳してきた。

この川は、大雨が降ると上流から木屑や板切れが流れてきた。川幅から溢れるほどだと、漂流物もモノがよくなる。尺二か尺五のパリッとした松材や角材がノタリノタリと水に乗ってくる。近所の人は、早速それを手カギのついた竹棒でひきよせる。その川の産物で牛小屋を建てた人までいる、私もそれをみて甲斐甲斐しく川っぷちに出勤したものゝ、手にした竹を扱うだけでくたぶれて今更ながら片手落ちの自分がうらめしくなる。そんな日女たちは土手や山手の清水の溜り場に出かけて洗濯する。だから子供たちは桃太郎の話は実感がわかないのである。おじいさんは川へシバ刈りに、おばあさんは山へ洗濯に、つまり話がさかさまになってしまっているからだ。そんな具合だから、私の庭先に集められる、川の拾得物は、イロリにくべるソダみたいに情ないものばかりだが、或日私の知人が軒下に乾いて散らかっているこの木屑をみて、少しわけてはもらえまいか、とつかぬことをいう。一体何にするのだ、というと生花にするという。はゝあん草月流だね、というとそうだという、濁水にもまれ風化しそして木目だけを粗々しくさらけ出しているその木屑の一つ一つは、絶好の蒼風式芸術の素材であるというわけだ。街の花屋にもこれが少くて、あってもモノによっては花よりも高いという。私は思わず笑って、そうすると尺五の割材より、この折れ線香みたいな木っ葉が金目なんだね、といったことだった。作業服に長靴をはいて、ブリキ屋か金物屋みたいにハンダゴテを持って作りあげる芸術より、やっぱり私は天地自然の生きた花やつぼみを水盤に活けて頂く方がどんなにすがすがしいか判らない、うちのかあちゃんも土曜日毎にこの生花の先生とこへ通っているが、貧しい床の間の上に、びっくりするほど新鮮な菊やヒヤシンスの花を見出した歓びは大きい。

いま家の横には、菊と南天とポンポンダリアが、花と実の若さを競っている。ポンポンダリアは、勤め先の近くの店で、十五円で買ってきたものだ。小さいボール箱に二つ三つのイモ切れを入れて貰ってきたのは、一昨年のことだが、今はこゝを先途と競い咲いて庭一ばいにはびこるに任かせて、枯淡な枯枝を縄で結えられた牡丹や芍薬の姿もすっかりみえない。若さと古さの対比が庭の中でもハッキリしているが、その向うでカンナの花の一むらが、ギ然とつゝ立っている。紅いその花は、秋長けた風に最早艶もなく、うらぶれた酌婦の姿の様ともとれる。私はこの花はキライである。敗戦のあの北京の病院で、私を嘲罵する様に、嬲り咲き猛っていたせいかもしれない。少し酷だが、次の休みには、ぷっつり根本から絶ち切って、川っぷちの石の上に捨てゝきようと思う。

―女学生のようにポンポンダリア、ダリア

―南天のどの紅さへも陽が点り

―枯影索然牡丹の綺羅のいまいづこ

―くら替えの妓の鹿の子かとカンナ

―南窓にまこと陶翁の賞でた菊

川柳家の二十四時

（7）

諸大家の真夜中の夢から、晩酌の銚子の数や食卓の皿の中まで覗かせて頂いた。諸先生の生活断片史として後世これが貴重な文献となるかも知れない。 ―編集局

金沢市 安川久留美

★一時――大抵白河夜舟です。フト小便を催しの時、眼があく位です。

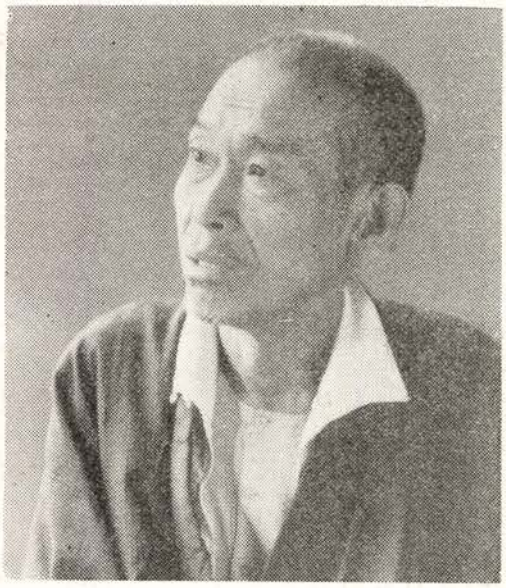
★二時――断片的な夢を見ている百万摑んだり、故人にあうたり

★三時――裏の邸の犬が鳴くから小窓をあける。そして又一ト寝入り。

★四時――完全に床を出ます。暗い枕許で湯賃を探します。

★五時――六時　顔は家で洗いません。杖にすがって朝湯へ（二ケ所）犀川口と中口。湯から出たところ、魚市場をまわることもあります。

★七時――八時　一寸一ぱい……という時間ですが、禁酒している（十月二十四日から）この時めし二碗に味噌汁と大根おろし。



★九時――第一便の来る時で何？は欠かさない。

★十時――雨が降らねば外出し、友を訪ねたり、古本屋を覗いたり。

★十一時――そろ〳〵腹へる。そばかパンか大抵外食します。

★十二時――金のある時はチキンライス一皿が関の山。

心まち。読書三十分、作句もする。

★十三時――一たん帰宅し、一時半の第二便を待ちます。

★十四時――近所の甘いもの屋でジュースか饅頭を少したべる。

★十五時――十六時　眠くなり、倦怠の時間でブドウ酒五勺余やることも有り、外に用のない限り、部屋にこもり、夕飯を早目にすます。

★十七時――十八時　半二（総領息子）が帰ってくる。新聞を彼の室へ。いまの部屋は無灯だから。大抵寝る仕度です。

★十九時――一寸又何かたべたい時はリンゴかみかんを買いに出る。

★二十時――もうお休みです。誰が来てもあいません。

★二十一時――二十二時　ラジオはないから静かです。隣邸がNという藤蔭流の師匠はんで、トントン板を踏む音が約一時間位

大阪市 金泉萬樂

★一時――五時　宵にコーヒーやおうすを戴いた時の外は熟睡中

★六時――孫（五才男）が早うから目を覚まして、あばれるのでうつら〳〵の一時間

★七時――娘夫婦の食事が済む頃家中で最後に起きる。ライオン歯磨を使うて洗顔を終り、朝刊をざっと読みながら老妻と末娘（十二才）孫の四人で朝食、夏はパンとミルクが多いが秋冬は勿論米の飯みそ汁塩こんぶ等々

★八時――阪急電車、市電の満員車で北浜の〇〇証券会社へ出勤（但し自由出勤）

★九時――十一時　証券関係の新

★二十三時――眠りの世界です。（タバコは少しもすいません）

★二十四時――眠りの世界です。（雨の晩は特に眠れます）

こりと痛みに
サロンパス
久光兄弟株式会社
東京・佐賀・大阪

聞又は新刊雑誌に目を通す。株式相場掲示板と睨めっこ、顧客からの電話を聴く。特に川柳家のお客さんが多い。売買計算報告等この間最も多忙。

★十二時——休憩、食事は外食。和食、洋食、支那料理、うどん等、その日〳〵の風次第。

★十三時——十四時　午後の立会開始につき又々相場板と睨めっこ。来社顧客の応接、商談（川柳家が多い）等

★十五時——十七時　会社退出して顧客を訪問、商談又は取引に廻る。約三時間の予定

★十八時——帰宅、夕刊は、朝日、読売、大阪と小説はみな読んでる。夕飯は娘夫妻とは大抵別、晩酌はやらないが、赤玉ポートワインを一杯。好きなものは、うなぎ、天ぷら、トンカツ、魚と名のつくものは何でも好き、刺身が特に好物。漬物はあまり好かない。

★十九時——ラジオは娯楽ものばかり、漫才、落語、浪曲、クイズなどを聴く。

★二十時——二十一時　孫と末娘は寝てしまう。それから週刊誌や川柳誌を読むことにする気が向けば作句する。老妻と羊かんをつまみ乍ら熱いお茶をのむ。但しこれは句会に出ない夜のことで、隔日又は三晩に一晩は句会へ出ている。

★二十二時——風呂は銭湯、寝る前に行く習慣がついている。日曜以外は朝風呂に行かない。

★二十三時——就床は殆んど定ったようにこの時間、ラジオをかけたまゝ横になっても十分間も聴かずに眠りに落ちて終う。寝つきは至ってよろしい。

★二十四時——グーグー

大阪市　西尾（にしお）　栞（しおり）

編集局の前書の諸大家云々の文章に大家ならぬ小生は些かたじろぎましたが、勇をこしてお送り致します。一日のスケジュールは左記の通り大体組んでいますが遺伝ならぬ突然変異がシバシバ起ってこの通り旨くゆきません。これが人の世の姿でしょうね。

★一時——五時　ぐっすり眠っています、疲れているのでこの節良い夢も悪い夢も見ません。

★六時——七時　毎日新聞、産業経済新聞を寝床の中で読みます

★八時——町内に老人組（四十才以上）のソフトボールのチームが出来て近くのグランドで毎朝練習します。シートはセカンドでバッター順は六番です。チョイといけるでしょう。朝食は河内生れですから茶粥におかきをいれて塩昆布で食べます。

★九時——十二時　その儘大阪の店で商売に従事します。（教育委員会のある時は八尾の市役所へ出勤します。月五、六回、午後三時頃までこの帰りに映画をチョットのぞきます）昼食は店の人達と楽しく戴きますからアルコールぬきです。

★十三時——十八時　八尾の工場で従業員の者と一緒に働きます干菓子の製造していますからとりわけて、おやつといって食べません。甘いものは見ただけで嫌やと思います。

★十九時——大阪の店へ戻って入浴、夕食（ビール一本又は銚子一本半）

★二十時——二十二時　ラジオをききながら一日のしめくゝりを致します。

★二十三時——二十四時　就床、夕刊の読み残し、雑誌、週刊誌を手からパタリ落ちるまで……

近作柳樽

麻生路郎選
北川春巣選

天高く寝冷の風邪がこじれかけ　愛媛県　村上旭童
半日の労作というハエの数　同
猫五匹かうて怪談めいてくる　同
曼珠沙華の候となりけり台所　同
哀れとも思う煙草の切れた夜　同
噂話に困らぬ程に村平和　同
人相が金貯め出してから変り　大阪市　橘高薫風子
顔見世の留守頼まれる十二日　同
鳥籠を預けて夫婦旅に出る　同
帯きゅっと鳴るも嬉しい見合の日　同
松毬を含うて楽し山の畑　同
鶏頭の紅さが憎くし逢えぬ日は　同
内職の灯とは夜長も淋しいね　倉敷市　藤井五茶
文化部もあり町内会金がなし　同
主婦の友夫も読んでつつがなし　同
下駄箱の隅で老いゆく妻の靴　同
名月や残業帰りとは淋し　同
芸術の秋DP屋にも儲けさせ　同　上林粗影
どこにある心か女化粧する　宇部市
刈入れを温泉の二階いとしがり　同
秋祭幼い夢をゆすぶるとこ　同
Y談をすれば太陽老人にしてしまう　同
花屋には七草はなし秋逝かんとす　同
幸福を寄ってたかって崩す浮世　同
セットもう伸びて白髪がふえはじめ　豊中市　石川ひさみ
金抱いていて人情と遠くいる　同
逢えぬ日も塗れば淋しさ消えてゆく　同
まだ恋に生る未練な薬飲む　同
清元の恋を枕の先で聞く　同　滝井貴洲
球根へ愛情そゝぐ斗病記　大阪市　同
毛糸着て師匠と言うを忘れる日　同
大阪に住んでて父も母も亡く　同
秋さむし一人っきりの膳で喰べ　同
縁談へまた相性を楯にする　同
会議遅々タバコのにがさ知るばかり　兵庫県　出口白猫児
ミルク罐灰皿にして万年床　同

柳友洋牛君恋愛結婚

見習えと田舎で恋を実らせた　同
自他共に許す小心義理固し　同
ストーリー地獄に仏チャンと置き　同　小浜牧人
コスモスの高さで乾くお洗濯　神戸市　同
停年の淋し上座へ坐らさせ　同
四〇の見合いが照れくさいロビー　同
埋め立てゝ積木のように建て並べ　同
寄附を乞う幹部とやらが空を飛び　同
大勢に流されまいとしてどもり　鳥取市　北村三歩
偶像も無理な願いと知っており　同
HBという感覚で今日も無事　同
一銭も要らぬと信心誘われる　同

幸福を幸福に（十）

戸田古方

科学というもの

川柳雑誌三五〇号（七月号）の川柳塔に〝オートメーションこわれることもあるように〟という句が抜けていました。投句の控えを見ますと〝オートメーションこわれることもあるやろに〟となっているのです。最初は誤植だと思いました。その後先生にお眼にかゝりませんのでしかとはいえませんが、誤植か訂正か怪しくなってまいったのです。

誤植だという理由は案外はっきりしています。「あるやろに」の「ろ」の書き方が悪るかったので「ろ」を「う」と見違えられたのです。「やろ」が「やう」となってみますと現代カナヅカイで「や」ではおかしく「よ」に直されて「よう」になってしまったと判断しました。ところが私の原句の「あるやろに」としますと、私の以前の句で先生の「新川柳講座」の二二頁に引用されている。

〝科学万能しかし機械は狂ってた〟

と全く同巧異曲でたゞオート

出雲路

団体が降りて大社の活気づき　兵庫県　同
エット機の世に御神輿を肩で上げ　同　吉原紅月
松茸の匂いローカル線が混み　同
娘の友が嫁ぎ慌てる親となり　同
柿むいてくれて結婚すすめられ　同
鍬握る指ペン軸をもて余し　同
貰らわれる話が恋へまたにぶり　大阪市　同　板東千代美
三味抱いた影があんたの膝へ折れ　同
舞扇つくろうのりを買いに出る　同
弟子みんな帰り師匠のお洗濯　同
家計簿の赤へラジオが故障する　大阪市　同　竹内花代子
コスモスを屋根で咲かせる生活ぢ　同
デザインを見に行くだけの帯をもめ　同
病床を見舞いダリヤを貰ろて来る　同
ふるさとはもう柿の実の色になり　岡山県　同　池上知恵美
愛情の力をかりるテキを切り　同
お茶漬けにしたい休みへ出る小言　同
稲刈りの鎌で便りの封を切り　同　藤本千永
心配は胃の腑にまでも泌みとおり　大阪府　同
染したくはないが抱きたい母の胸　同
新薬が出来ても映画肺で死に　同
病歴と同じ年期を趣味へ入れ　同
清貧へ系図の誇り失わず　岡山県　同　杉田明美
縫うよりも型を選ぶに暇がいり　同
蒔いて来た罪が実ったおそろしさ　同
若白髪などとは言えぬほどにふえ　同　仲野花鶴美
ソプラノと紙一重なりヒスの声　天理市　同
彼女来る日花瓶の吸がら掃除する　同
おさがりをなだめて着せてもらり　同

赤蜻蛉運動会の空を切り　同
汚職とのうわさをよそに鬼瓦　広島県　同　平田越舟
看護婦を笑わせ患者とも見えず　同
意気地なく妻を特売店へやり　同
押売の体格ほめれば荷を仕舞い　同
不渡りも書かずボロイこともせず　大阪市　同　米虫一乃字
映画出て秋の夜の冷え耳たぼに　同
円の皺も伸して車掌です　同
人だかり抜けてパチンコ負ろて来る　同　菱田満秋
小説が他人事でないふしあわせ　天理市　同
焦げる程燃えているのに六度五分　同
意見するだけの親戚ばかり持ち　同
両親の供養気にして病んでいる　同　景山素生
天高しこっちは髪が抜けるだけ　米子市　同
里帰り乳を飲ませてばかりおり　同
病院の方が御馳走あるくらし　同
くたぶれた服へ綺麗なナフタリン　同　傍島静馬
月の出ぬ月見で風邪を引いてくる　神戸市　同
天高く胃散に頼ること多し　同
えゝとこで会うたと荷物持たさ　同　仲どんたく
老妻の同権かぶれ不気味なり　同
あくせくと暮した十日の爪を切り　神戸市　同
焼香もオートメーション式に済み　同
禁煙三日貰い煙草で節を曲げ　同　辻文平
ゼスチュアでお祭しを乞う英会話　同
農繁期寝付きの悪い子を叱り　兵庫県　同
M過剰締めたる帯にかくされる　同
平穏にすめば祭が物足らず　同
引越しの鏡は妻が抱えて来　同　岩田十三楼
即身成仏和尚はうまいエチケット　福岡市　同
豊年もよいがよかつた尺祝い　同

メイションということばに新らし味をもたせただけのものでしかありません、句の深さからいっても大してかわらないものなのです。

ところがこれを「あるように」としますと「オートメイションという最も新らしい、便利なしかも完全な機械でもこわれることもあるように仲々信用って出来るものじゃない。一体何を信じたらいゝのか、デカルトの如く『われ思う故にわれあり』とでもいわずにおれない」というように句意に格段の深味をもってくるのです。

何にしても私の作ったものでないのですから、もしこの句が問題になってほめられたとしても私にはほめられる権利はないのです。私はこのことから、機械というもの、科学というものについて少々考えさせられましたことを、これをきっかけにして述べてみたいと

ヒゲソリ後に
アストリンゼンは世界的常識！
1 生々した男性美をつくる
2 爽快でヒゲソリがたのしい
3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力！
明色アストリンゼン
桃谷順天館

開かれない前に月賦のテレビです　同
ステテコで風呂焚く社長見た話　同
気に染まぬ見合だからよくしやべり　大和郡山市　藤田凡々
夢を持て夢をとホラを吹く男　同
アルバイト浮気ではないドレス着る　同
質の字が大きく見える如何にせん　同
台風がそれて瑞穂の国の色　西宮市　徳永貴美
あたたかし欺すお方の手ではなし　同
化粧して他人の顔にしてしまい　同
よき妻と言う白粉は半分はげ　同
逢曳と見合は別なネックレス　名古屋市　野田一念
野次馬が走る後から消防車　同
新家庭便所の中まで菊薫る　同
秋風へ籐椅子どこへ置きましょう　同
おこり酒こわ〳〵酌をされている　大阪市　西川晃
妻の眼を背に感じつゝ巷を止めず　同
倦怠期思い〳〵に虫を聴く　同
芸術家肌が妓を煙に巻き　同
天高く味覚の秋に病む胃なり　大阪府　沢田美喜
サンマにもあきて思案の市場籠　同
おらが村看板だけの市となりぬ　同
曼珠沙華父の墓まで続くなり　岡山県　杉本たつよ
口の紅濃ゆき田舎にしたしめず　同
叱っては見たが寝息が気にかかり　同
お見合を地味に着て出て断る気　大阪市　矢馳千鶴美
愛の巣の夕刊ひろげただけのこと　同
染直し着ても恋はたのしそう　同
メスの切味で落付いて来る外科医　大和高田市　岩垣日本村
自信満々超特大のイヤリング　同
よく似合いますと売場は皆似合い　同

事勿れ主義でごもっとも〳〵　貝塚市　杉本一鶴
働き甲斐おますすく〳〵子は育ち　同
夫婦して風邪のシーソーゲームなり　同
御本人も知らない花で見舞てくれ　貝塚市　阪本阿季良
くちづけの後に虫歯が痛み出し　同
いつとなし小皺も出来て母がわり　同
おしやべり奥さん死んで隣へ遠くなり　熊本県　淵川秀敏
お祭りが済んで女は肩が凝り　同
ゴム草履履いてきもいりさん忙し　同
ゆっくりと行商菊の駅を降り　貝塚市　阿部かつみ
もう貸して呉れぬ酒屋の灯が明い　同

津田千舟氏退院を祝す

横丁出て今日は表へ張るのれん　同
齢が齢皆が案じて呉れる風邪　滋賀県　土守トン坊
倦怠期なんて知らずに寡欲なり　同
貸して呉れぬから恨むとは迷惑な　同
御先祖の罰とはけしからん病気　大阪市　山本立児
トイレへ寄って部長をやりすごし　同
課長の椅子より停年が先らしい　同
停年の鶏を飼うには惜しい髭　岡山県　太田蓑流
毛糸玉青春惜しむよな手つき　同
葬式がドライブウェイ横に切り　同
ロマンスグレーお金で出来る恋にあき　福岡県　三上春雄
テレビなどないが子宝なら負けず　同
こゝまでは安い会費の酒であり　同
奉献と提灯神へ背を向け　善通寺市　橘十四呂
あの頃は若かったよをくり返し　同
新米を甘酒にして村祭り　同
子沢山もう洗濯機酷使され　大阪市　半田夏生
重い程金つぎ込んでまだ癒えず　同

思うだけです。

機械は機械です。日本人のしかも機械をあつかいなれない素人の人は少くともまだエレキテレルの時代とあまり遠くない程度の考えしか機械に対してもっていないようです。

高いお金を出して買ったんだから——なる程機械は高いお金を払らわないと手に入りません、産業革命のあと資本主義が急速に発達したのも高い機械設備をとゝのえるため株式のやり方で大ぜいの人から資本を集めたのでした。とにかく高いお金を払ったんだから何が何んでも一生もたねばというわけで大切にしたのは結構ですが、膏薬張りでも繃帯をまいたまゝでも無理に無理を重ねてとことんまでつかいます。

これがアメリカですと、どんな機械でもマシンというわけで拍手をうっておがんだり後光がさすとまぶしがったりしません、最良のコンデイションの間だけしかつかわず、どこか少しでも欠けるとすぐすてゝしまって新らしいのと取りかえます。終戦後やって来たアメリカの自動車のタイヤがいつも真新らしかったり、一年もたたないのにすぐペンキを塗りかえたり、けっこう着られる背広がセコ半に出て来たり、ずい分ぜいたくだなと思いましたがあれがほんとうなんでしょう。

最良のコンデイションにしてはじめて最大の能率を発揮出来ます。製作会社の企図室の計算通り

薬なしこの病肺をえぐらねば　同
見るだけのウインド斯くも豪華　出雲市　板倉　三文
安売りをリンゴ祭りと銘打って　同
ペン習字する気で母にねだる金　同　石橋万古人
まだ惜しい命へ禁煙強いられる　出雲市
柿の木へ母の苦労が一つ増え　同
一手毎鰻丼代があちこちし　同
急カーブガイドの腰にある重み　玉野市　則田水鏡子
マドロスと間違えられた港の灯　同
渋柿と知らずに出来をうんとほめ　同　江国　幽谷
死刑囚舎房で神の顔で生き　岡山市
洗濯機買えば本家が使いに来　同
田を植えたお祭客が稲を賞め　同
税務署のうらで居酒屋儲けて居　和歌山県　木下　一休
転居先き月賦の鞄が訪ねて来　同
盃を下戸は小さな音で伏せ　同
借り腰の強いところを見込まれる　大阪市　富士ひろ子
我儘な女房で養子かと訊かれ　同
衣裳だけ新調にして再婚し　同
先代が死ぬと専務の口がすぎ　金沢市　能村美佐緒
恐れ入りましたと社長を馬鹿にする　同
説明をされても読めぬ前衛派　同
女子大出案山子のような養子が来　宇部市　平田　実男
小走りでパーマ屋を出る十二月　同
警官になった悪友挙手で来る　同　鈴木村諷子
菊咲かぬ家なく村は稲を刈る　鳥取県
お華の娘集めて師匠若返えり　同　伊原　明林
買えるなら買えと洗濯機並び　岡山県
お見合が済んで美味しい菓子になり　同　井上美恵子
ちっぽけな暴力ニキビを押しつぶし　大阪府

百ミリに濡れて静かな街となり　同
形見分け引潮の様に持って去に　岡山県　小田　紫草
ねえや嫁入り
高島田りんごの頬もうつむいて　同
親一人子一人息子ぐれてくる　七尾市　前浜喰多路
故里の酒と水とを自慢にし　同
血圧はこうせあーせと見舞に来　芦屋市　里田一ン十
注射まで持たせて医者と菌狩　同
前任におとる酒量をあなどられ　兵庫県　前川　越山
豊作が続きばた〳〵娘が嫁ぎ　同
施主曰ク亡父も御酒がすきでした　京都市　竹松　九角
御法事の酒でコリヤ〳〵とも言えず　同
妓さんの指導で鮎の骨を抜き　兵庫県　永尾　英断
欠伸して妓に酒を勧められ　同
助骨切って保険屋までにみはなされ　姫路市　植村客遊子
大安で雨が降るのに越して行き　同
馬肥ゆる秋にやせたい無理を言い　大阪市　米浪進之助
感激のシーン男五十鼻をかみ　同
生活にゆとり見つけて未生流　大阪市　橋本　雅巣
クイズ〳〵郵政省に奉公し　同
鉢の木のように背広を手ばなさず　大阪市　小島きぎす
十円がとこを歩いて稼いだ気　同
桃色の遊戯だなんて燃えてるに　大阪市　大谷　龍花
秋晴れの下ででっかい嘘をつき　同
お見合へ姉の体験聞いて出る　天理市　原田　綾女
失恋を勝気プラスにする気なり　同
美しい景色もビール代に入り　貝塚市　護川　梢月
スクーターで来たのに二時間待たされる　貝塚市　小田　柳叟
世智辛い世相枢をダンボール　同
ビタミンで患者のヒスを押えとき　同

が末端にまで行きとどいているのです。だからほんとの科学を科学的に利用出来るというものなんです。日本にだって生産方面ではずい分こうした思い切った科学的利用の方法がなされてもいるでしょうが素人にまではとうてい行きわたっていない思想です。

あんな句を作ったというのも私自身が貧乏くさいからでしょう。

原子力の平和利用の映画を見て、心配せんでもよい心配をしてチョコ〳〵と作句したのがあの句なんです。停電になったらどうするとか、スカートの裾がはさまったらどうとか、一すじのほこりが入ったらとか農にもつかぬ心配をしたものでした。

いくら科学的に出来上ったものを科学的に利用しても、所詮は人間の作ったもので故障もありましょうしこわれもしましょう。

マシンのことばでそれもみんな勘定の中へ入れているのがアメリカ人の科学の世界です。

名医といわれる人は科学を超越しているといわれています。名人も又そうでしょう。非常に科学的で、しかも普遍的な科学でなく、自分の個性とピタリと合う特性の科学を悟り自分のものとしているのでしょう。他人がそんなものを手に入れようとすればずい分むつかしい計算をしなければならないところを、多年の訓練と経験で、自分に最も適合した科学を身につけているのです。あるいは科学を越えた科学という方があたっ

初夜権のように手中の三元牌　伊丹市　小川静観堂
虫の声降る夜の麻雀負けつゞき　同　光好陽子
ニコヨンの幸青空の日が続き　岡山市　同　藤冨淀月
老らくの恋狂人の沙汰にされ　同　高瀬幸路
凝り性の見栄はざる碁にかや碁盤　守口市　同　遠山一雨
しみ〴〵と生きてる幸のどびんなし　兵庫県　同　高木土佐三郎
程々に刺戟慾しいと株を買い　石川県
卵抱く鶏の安否をちと覗き　同
ポケットを全部さがしマッチ出し　兵庫県
一球を投げれば俺の月給か　同
仲人に似合いの夫婦とおだてられ　高槻市
共同募金
愛の羽根附けたで胸も少し張り　同
二親の短所ばかりが伸びる子よ　兵庫県
足を組むポーズもミスと言う誇り　同
娘の嫁く日父いつになく深く酔い　天理市
国鉄白書、赤字
枕木を喰う虫ヤアヤアで通り抜け　大阪市
人道地に落ちず映画を見ても泣き　大阪市
オートバイでも夕立を追いぬけず　同
牛乳も飲まず邪教を信じきり　岡山県
仙境といわれ僻地に御満悦　同
退職へ匙で食べる子が二人　七尾市
剃刀と言われる男の金廻り　同
胃薬を残して祭日が去に　鳥取県
貼り変えた障子背にして娘の点前　同
邪魔な人居るらし電話ピンと来る　大阪府
花にふれた恋人をとる二眼レフ　同
井戸端へPTAの会続き　大洲市
泣声を頼もしがってから案じ　同

歯に自信あってビールの栓もあけ　大洲市　尾花群雀
正確迅速字はあざやかなかぎり　同　奥富天作
一匹がなんときたない他家の蠅　宇部市　同　御戸凡平
符節を合せて引下る処世術　同　中村九呂平
世話好きの良人の菊を切るは妻　広島県　同　岩田八文銭
人間としての凝念を医者も持ち　下関市　同　青柳扇子仙
残り酒板前太平楽に呑み　同　塚脇笑太
でこぼこの道近廻りするから荷　同　小出督生
うまいこと言うて来るわと送金す　鳥取市
豊作をむかえた今もたべられず　同
酒がつきまとう僕の太平記　大阪府
穏健で中庸それが物足らず　同
笑うのも子供からとは子は宝　京都府
極楽へ行けそうもない口をきき　同
さかさまに財布ふるって子にもたせ　長野県
上高地にて
キスなげて晴れた穂高にいとまごい　同　室井八九寸
其筋は魔がさしたにはしておかず　田辺市　同　安平次弘道
派手なアロハ脱げば刺青派手な　同　岡田亀郎
社内対抗社長を三振にする若さ　山口県　同　久家代仕男
流行品買ってタンスにしまっとき　同　秀川承平
無神論者ばかり揃うて一家無事　岡山県　同　荒木狂風
豊年が二年つづいた祭笛　同
ロマンスグレーお座敷ダンス好きとう　平田市
五万円あずけ風采見直され　同
老眼鏡追手の様に届けられ　福岡県　同　阿部たけし
口紅の色にも迷う宵まつり　同
信心を嫌らわぬ医者で頼りなし　岡山県
張り切った乳房へ除草まだ残り　同
うすうすは公金と知る使いぶり　倉敷市

ているかもしれません。

西洋医学を一歩も出まいととらわれるのは馳け出しか藪医者のすること、名医は顔色で診断がつくということです。漢方もあれば鍼灸術だってあります。名医はどれもこれも否定しません。

ニュートンは浜の真砂の一握りを掌の上にのせて、私の知っているのはこれぽっちだと申したということですが、正に名人の心意気といわねばなりません。

生兵法はどんな世界にでもいけませんが科学の世界ではことにつゝしまねばなりません。

科学が精密になればなる程少しの誤差も問題になります。数学はこうした訓練にうってつけで少しの誤差も見のがしてはくれません。

数学程はっきりその誤りが具体化されるとよいのですが、たいがいはごまかしてしまいそうですし、ごまかされてしまいそうです。

オートメイション大に結構、しかし、オートメイションを利用する前に利用する方で科学的訓練を充分にしておく必要があります、科学的利用用方法といゝますか科学精神といゝますか、それが出来ていなければ狂人に刃物みたいにあぶないです、もっと勉強しなければならないのです。

科学は化物です、ものではありますが利用する人によって生かされも殺されもします。科学はまことに従順です、しかしその理解者

騙される言葉のリズムさわやかに　同
お神輿が文化に遠く練り歩き　岡山県　吉田　清遊
百姓の顔では見ない旅の稲　同
附添のイビキに夜長をもてあまし　西宮市　山本九里三
読書の候食慾の候で金がいり　同
見舞われた嬉しさ知れば見舞い　岡山県　松永喜久枝
愛されている幸福が米を磨ぎ　同
諸肌をぬいで化粧の後向き　石川県　前田　俊夫
竹垣がおさな馴染の仲を知り　同
鍵明けた方が飯炊く共稼ぎ　今治市　池内　好月
柔道を知って居るので売れ残り　同
振り返える程の美人は連れがあり　宇部市　鎮波　錦花
オールドミスまだ〳〵おもてる気配なく　同
失意の日鉄道沿いに歩いて見　松江市　舟木与根一
あて推量だったに子供白状し　同
振袖の虫干し母に着て見られ　高知市　須藤　俊江
愛嬌のよいのもよいが笑い過ぎ　同
子沢山化粧をすれば尋ねられ　金沢市　松永　恒青
一年を楽しんだ庭打ちかえし　同
朝霧へ尼勤行の木魚うつ　玉野市　星川　陽石
子宝と言う重荷抱き今日も生き　松江市　岡崎　祥月
確かりと育てたい子を甘えさせ　群馬県　荻原　竹郎
自己批判転んだアトの杖ひろい　大阪市　広瀬我利婆
誕生日御神酒に胸のふくらめり　石川県　斉藤　巌
末ッ児の遠足総動員で出来上り　尼崎市　林　澄子
物乞いも一役買ってる赤い羽根　川西市　沢池紀久江
悩んでる編棒母は見逃さず　岡山県　岡崎　一也
愛情は母強情は父に似る　香川県　香川　雅人
案外の強腰先口あるらしい　大阪市　勝山　茂博
写真顔はめて失礼なと言われ　天理市　岡田花奈女
赤い羽根つける倖せ感謝する　宇部市　神田　豊年

青春に悔なくせがれ学を卒え　八代市　永松　道雄
光陰の流れへ張ったサロンパス　宇部市　岩原　箔川
来客へヒスとは別な顔で逢い　河内長野市　森本黒天子
三味線に振袖着せて病んでいる　貝塚市　津田乃武康
全快という眉を引き紅をつけ　今治市　越智　義夫
機関車が十円買ったのはさくら　広島県　寄金　一荷
スポンサーなかなかこまい芸を持ち　貝塚市　川原　小雷
キャッチャーだけグローブはめてる子の野球　笠岡市　松本　忠三
先生にするのは惜しい芸達者　大阪市　河井　庸佑
豊作の手不足嫁が先に来る　西宮市　野呂　湖鳥
すば抜けている履歴書に職が無く　高知市　小松　梅林
坐るのは苦手と見える婦人会　奥市　青木　徴酔
約束へおくれてじらす手を使い　広島県　小林てるじ
手伝いをして割勘の酒を飲み　石川県　林　古意知
雨漏へ明日も続くとラジオ言い　笠岡市　出原　真奇
油売る苦労もまぜて事務机　大阪市東　池戸　桃村
町議長鼻糞ほじって議事を聞き　奈良県　木村よしを
神苑へサイクリングも御時世か　犬阪市　小野木凡平
鼻の先やんわり叩く淑やかさ　大阪市　豊島　フク
親馬鹿で家庭の平和続けてい　倉吉市　奥谷　弘朗
お土産を螢光燈の色でより　豊中市　小林　山舟
たんねんの朝顔の夢捨る秋　愛媛県　河本南牛子
女房の留守に晩酌物足らず　高知市　金沢　酔雀
お化粧の濃さが恋する色となり　大阪市　河原　瞳
流行歌ちぎって聞かす宜伝車　高松市　山本　英舟
税務署にはいはいはいと馴ら居り　倉吉市　池戸　桃村
葬式屋の社長スクーターで乗っける　西宮市　打吹しげる
父ちやんの足音で止む子のけんか　広島県　樋口　舟遊
ヘップバーン前へ廻れば四十過ぎ　和歌山県　山田スミ子
悪口をしやべって凡児金になり　堺市　浮田比富美
趣味と云う二字で社長と立話　宇部市　田中　狂二
　　上杉　雪峰

以外にはとんでもない暴君振りを発揮しないともかぎりません。
科学利用者に一番大切なことは謙譲の礼です。謙譲でなくしては無理がともない自滅するかもしれません、謙譲の心は自然科学の世界だけではなく人と人との交りの場である社会科学、人文科学、精神科学の世界に於てもすぐれた真の意味での成功者になり得るのです。
―一九五六、七、二五―
（初孫　越智奈津子命名の日）

○青ペン○　赤ペン

毎号誤植があるようで、まことに申訳ないと思っています。清記されたものを今一度原句と首つびきして、初校再校と時には三校までするのですが、やはり誤植のあとを絶たぬとは実に残念です。「一流新聞社でさえ句や雅号に誤植がある。柳誌で活字が横になっていないのは川雑だけだ」と慰めてくれる人もありますが、ここのところ校正ノイローゼです。
原稿用紙のあのマスの中へ二十字も入るような小さい文字を書く人もあります。「の」やら句読点の「。」やら判らないことや、地名や人名のくずし字を、編集局がクイズを解くように鳩首協議？することもあります。
どこの雑誌社でも文字は正確にと規定してあるのも誤植防止と能率化のほかならぬのです。かくて浅学薄才の編集子、文字は楷書でご協力、ご指導の程を。（一三夫）

川柳 一万円札（アンケート）

いよいよ十二月に一万円札が出るそうですがサテ、世の川柳家社これを川柳の眼鏡をとしてどうご覧になっているか一句添えて答えていただきました

○
千圓につぶしてやつと役に立ち
川村　好郎

一万円札が出来た。近所のお宅へ養子が出来た。という程度しか感じない。養子が出来て賑やかで便利だろうが、ウチには縁くもかゆくもない。しかしどんな顔でどんな肌合の人か見たい好奇心はある。年に一度や二度はウチへもお越し下さるだろうが甲斐性なしのウチでは、おもてなし方も知らず有難た迷惑だ。先方も愛想をつかせてすぐ帰ってゆくだろう、まあ早くこんな方とお付合をして、始終ウチへも出入りして頂くようしっかりせなあかんと思う。

○
一万圓札昔ならねと透かしてみ
正本　水客

父（会社出納課）
―また、定員の削減があるな。
母―父うさんのビンハネがしにくくなりますわね。
息子（新聞記者）
―もう贋札を使って捕ったニュースがはいった。
娘（タイピスト）
―十二月から、お給料のとき、二千円貸してね、母さんお釣りを持って行くんですって。

○
贋辯も買えぬ一万圓を持ち
黒川　紫香

「御乗客の皆様にお伺い申上げます、さき程○○駅で一万円札で駅弁をお買いになり、釣銭を御受取りになれなかったお客様、列車々掌まで御連絡下さい」こんな車内放送が出そうです。

○
一万圓こわすに無駄なものも買い
丸尾　潮花

一万円札が出ましたら、それは安サラリーマンには縁のない事であり悲哀でしょう。俸給袋が軽くなる、一万円をこわすのに無駄なものも買わねばならず、物を買ってもお釣りを貰うのに気兼ねをせねばならず、又釣銭のない小さい店では、お客を迷がすことにもなりますからね、私達には不必要でしょう。

○
一万圓札になつたを見せあるき
三鴨　美笑

気持のうえではお金を軽視するかもしれないが、旅行するのに大変便利になってくれる。これは私の場合であるが旅先で小切手も切れないし。だがサラリーの俸給袋はなんとなく味気ないものになるでしょう。当分は奥様達の話題ともなり、二、三枚の一万円札を大切に持ち歩く方もあるでしょう。私の手にはいった一万円札第一号の裏にサインでもして一万円札の旅を見まもりましょうか。

○
捨てはせんかとポケツトあらためる
尼　緑之助

驚きもせず、たいしたうれしくもありません。たゞ、滞在してくれないうらみをあじけなく思うばかりでしょう。

○
一万圓札主婦の財布に用がなし
西村　梨里

千円札で数えるのは手数がかゝるなんて身分になってみたいですね。給料取りには縁の遠い話。

○
一万圓パツパツパツと誇めぬなり子に見せる間もあらばこそ一万圓
菊沢小松園

子沢山の現在の生活ではもし迷うて入っても、現代柳樽でこれ一万円たった一晩も居ないかも知れません。況んやコレクションに一枚取っておく様には決して出来ませんでしょう。

○
一万圓札裏を返して大笑い
西尾　栞

実際に通用してみないとピンと来ませんが、昔よくお札の裏面に五管に訴える以外の器管を刺戟する或種の絵が画かれていたので、一万円札をもてばキット裏返してみたくなると思います。

○
貧乏国の知悉者一万圓札が要り
武部　香林

一万円札を誰が使うんだと安サラリーマン、そんなのもらったら市場で困るワと女房。喜ぶのは銀行と株屋、それにヤミ取引やもう一つある、贈収賄にはもってこいである。凡そ正常な取引ではあまり必要の無いシロモノで色々なナンセンスも飛び出すことだろうと思う。かっての取引高税小包米政策に次ぐメイ案である。

○
一万圓不足一枚読み違え
冨岡　淡舟

金を扱う人達にとっては真に便利なものだが、一枚読み違えるとさあ大変、一万円の不足ともなる吾々安月給取りには果して手に入る時は何時の事やら。

○
へそくりに一万圓札はちと困り
森下　愛論

「一万円札発行」
〝これ小判たった一晩いてくれろ〟
古川柳が思い出されます。月給袋にもし入れてもらったら「オツリ」を持って行かな、なりまへん。あまりこんな大型紙幣は出ない方が良いと思います。

○
一万圓四ツに折つてぶらりと出
国弘　半休

四つ折りにした一万円札をポケ

ットにしのばせてぶらりと出たまでは良かったが、勘定を支払おうと思ってもその一枚が見当らないさては紛失か？

口でこそ一万円であるが、たかが知れた紙幣一枚だ、金の価値はこんなところからも低くなって来る併し乍ら拾ったバタ屋にしてみれば一枚で一万円の稼ぎとは有難いかな。

○

一万紙幣に太子の労基法

山本　葉光

日ソ交渉で引退の花道を飾る鳩山さんと、鉄路の血汐を涙で洗う名優十河さんの其の涙のかわく間もなく、弔費を値上で稼ごうとすれば西海ならぬ南海私鉄も同じ路を通ろうとつづき、インフレの跡白浪と濁し、百円銀貨で減税の手品によって目をくらませようと、一万田さんは聖徳太子を百円、千円とかけ持ちをお願いして記念に一万円札を残すとは——。

○

聖徳太子小さくするのに骨がおれ

水谷　竹荘

一万円札が出来たらサラリーは一枚か二枚。へそくりするにも一苦労でしょう。

タバコ買いに行っても
つり銭がないとあっさり
ことわられ

喜んでいるのは銀行員と会計係でしょう、札束の勘定が楽になってね。

○

一枚のままで一夜も居てくれず

清水白柳子

一万円札と言っても戦前の二十円札位の値打しかないおさつ。

十円札の代名詞が「いのしし」だったから、さしずめ一万円札は「くま」位のところかそれとも夢殿だそうだから「ばく」の方がよいかも知れぬ。

○

臍繰りを一万圓札に封じられ

直原七面山

世の臍繰り族が大恐怖を来す事だろう。僕もその一人なんだが月給の胡魔化しがきかなくなる、又電車、バスの無賃乗車が流行るだろう。千円札が出来た当時以上に、十円の電車賃に〃一万円で釣りがあるかね〃と出られたのでは車掌さんが大迷惑、九千九百九十円のお釣りをそう〳〵用意して持っている訳にもゆかず。

それに又、銀行員も暇になり人員整理の問題が晦日をひかえて起きて来るかも知れないね。ともあれ一万円札の出現は世の中にもろもろの悲喜劇をかもし出して行くことだろう。

○

市場籠一万圓札も入れており

山川　阿茶

一万円札位い何ンやたかが昔の百円札やないかとは思うものの、百円札にすれば一寸「かさ」のある私の財産も一万円札にすると、吹いたら散る程の「かさ」になって財布の中で泳ぎそうで一寸心細うなりますがな。

市場籠に一万円札という豪勢なのもあれば我々なら
〃一万円札のおつりにうろちょろし〃
と云ったところですやろ。

○

一万圓札たった一ト晩居てくれろ

小西　無鬼

古句に曰く
「これ小判たった一ト晩居てくれろ」とか。

安月給取りや小商人に一万円札がフンダンに使えるものか！喰えぬ奴は死ねという政府の肚らしい。千円札と一万円札と一枚宛交換してやろと云うなら話は未だ判るが……。

○

一万圓札で高飛足がつき

八木摩天郎

一万円札束とも知らず手あたり次第握ったが、何処でも両替えしてくれず、釣銭にも困る仕末にもてあましたのが運のつき、人相、指紋、札の番号に鑑識課の凱歌でケリというナンセンス。

○

一万圓札の客は待たせておいて売り

真鍋　一瓢

戦前の百円札ならあることだけ知っとりゃ良かったんだが、今度出来るという一万円札は、月に二枚や三枚は取り扱いもしなけりゃならないとは嬉しき限りである。成程銀行や会社の会計なんかは高能率になるだろうが（又人が要らなくなるんですぞ）私共には悩みの種が一つ増える。サラリー日まで待たせた電灯屋や新聞屋に一万円札を出して「これで取ってくんな」ともまさか云えないし平素愛想の悪いおでん屋で一回位いは両替させる手もあるが、度重なると「あの親父奴また両替に来やがった」と、青酸加里でも盛られたら一巻の終りです。

○

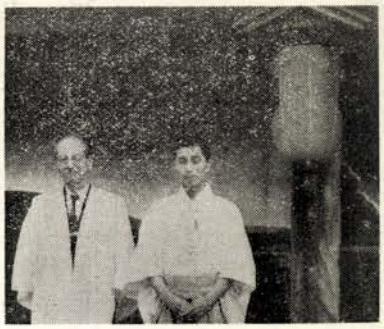
一万圓札が出来たらさみしかろ

不二田一三夫

ハイ放浪画家山下清の言葉を借りるならです、つまり兵隊の位でいえば千円札が佐官級で、一万円札は大将ということになりますかなハイ。しかし場末の映画館の売店では、最高二十円のキャラメルよりおいていませんのでおそらくその大将様にお目にかかることもよもあるまいと存じますハイ。

文化勲章の実費が一万七百円ですから一万円札といえどバカになりませんですハイ。

もしも私が一万円札を持ったことがあれば、それは標語の賞金が入った時だけだと思います。おさみしいこッてすハイ。



出雲大社參拜の
麻生路郎主幹

柳界展望

▼本社師走川柳大会は十二月九日午後一時から下寺町電停前光明寺で、恒例によって支部対抗句戦紅白試合等々多彩な行事で開催される。多数柳友を誘い来会されたい。なお句会終了後忘年懇親宴が催される。▼南区医師会文化部杏林川柳会は十一月十八日午後二時半から阿茶居で開催され四時半から文楽へ▼南海電鉄川柳会は十一月廿六日午後六時から粉浜親和寮で開催▼既報大阪市文化祭第八回大阪市民川柳大会は十一月十一日午前十時から大毎三階講堂で開催。本社から、路郎師出席され、本年当番のさつき川柳社主宰阪澄風氏病臥中を伝え、同氏の責任感を思い同氏に代り句会進行等に特に力添えされ柳友を慰められた。▼大阪交通局川柳会主催文化祭参加川柳大会は十一月十六日午後五時から同局病院五階サンルームで開催されると共に、川柳短冊作品展示会を同局北階娯楽室で十一月十五日から三日間開催好評を博された。以上路郎主幹出席▼毎日新聞社主催関西短詩文学連盟協賛のあやめ池菊人形協賛川柳の発表並び表彰式は十一月十八日午後三時あやめ池野外劇場で開催。路郎師兼題応募入選句を発表、潮花、水客、紫香三氏会場備付投函句の入選句を発表、毎日新聞社から賞品及賞状の授与があった。▼川雑淀川支部（大阪市）十二月句会は四日午後六時から東淀川区三津屋北通四ノ二九、武部香林居で開催。兼題「縁」「底冷え」「灯」の三題▼3・3・3川柳会（堺市）師走川柳句会は十二月五日午後六時から島野工業株式会社会議室で開催。兼題「自信」「通天閣」「耳打ち」の三題の外、角力吟等も催される▼富柳会（富田林市）は十二月八日午後一時富田林市役所日本間で開催。兼題「居残り」「ふた」「年の市」の三題▼前田伍健氏（松江市）からの消息によると十一月十一日愛媛県丹原町、興隆寺の四国川柳大会に二十三日新居浜市宗像神社でタヌキ祭、二十五日住友化学文化祭川柳会等で多忙の由▼蛭子省二氏（愛媛県）は十月十九日の誕生「病めば誕生日の慈悲柿一つ」の病床吟を寄せられた。▼鯱ほこグループ（名古屋市）創立川柳句会は、田垣方大氏の発案で結成、十一月四日午後六時から名古屋市中村区岩塚町長尾越鳥居で開催▼川雑淀川支部は十月十八日西宮市若本多久志居で水堂、東洋男、三十郎、香林の四氏来集、支部句会の在り方を研究の結果、席題を廃し新人の作句指導の時間に充当、十一月句会から実施する由▼川雑高知支部は十一月七日吉良義生氏方で高知蛾紡句会を催した▼三井造船川柳会（玉野市）十月例会は、二十五日午後六時から三友クラブで開催。なお同社労組主催の文化展に川柳関係八十名の出品中短冊入選四十名を占むる好成績であったと▼蕭川柳会（松江市）十月例会は、島根療養所で二十日夜開催▼せんば川柳社（大阪市）十一月川柳句会は十一月四日午後六時から大阪南美術会館で開催▼番傘川柳社は大阪市北区木幡町四へ移転▼岡崎祥月氏（松江市）は、出雲市川柳大会で路郎師に十五年振りに会われた事を喜ばれ、「行楽の秋出雲路もいゝ日和」の句信を寄せられた。▼里田一ン十氏（芦屋市）は、高血圧で暫く静養のところ此程平常に復し元気に出勤されている由。▼津田千舟氏は十月三十一日無事退院され、大阪市住吉区安立町六ノ七の自宅へ落ちつかれた。▼速水真珠洞氏（福岡県）は、十月八日全国一の胃腸湯治所大分県湯の平温泉に遊ばれ同地から「峯上の松から秋を電波する」の旅信を寄せられた。▼35年前陛下がまだ摂政だった頃松山へ見えられたさい、生魚を献上して旅情をお慰めした日を記念に川柳の会を設け、鮮魚商の林庫太郎氏や前田伍健氏らが中心にこの度び陛下へ川柳を献上することになった（幕の紋ゆれて祝電届けられ・伍健）▼坂澄風氏（大阪市）は大阪城北市民病院に心臓病のため十月七日入院加療中との報に接し、路郎主幹は十月廿五日同院へ親しく見舞われたが、御全快を祈る。▼永尾英断氏（兵庫県）は永断と改号▼奥谷弘文氏（倉吉市）は十一月六日に本社訪問、路郎主幹と歓談された。▼長陵川柳会（新潟県）主催柳都川柳社、新潟日報社、後援の川柳「長陵」五十号記念特別誌上川柳大会開催。課題路郎選「親ごころ」民郎選「山国」風柳選「けちんぼ」五花村選「進歩」三太郎選「玉」水府選「多忙」紋太選「話」伍健選「紅白」雀郎選「継ぐ」周魚選「顔」投句〆切十二月十日、投句先長岡市表町二丁目長陵川柳会宛二月号同紙発表、投句費五十円郵券代用可▼川柳アパート（東京都葛飾区青戸町四ノ七〇）から川柳蜂窩房発刊。

（摩）

清酒
金露
灘・魚崎
大塚合名会社醸

不朽洞会から

▼本会の理事改選と常任理事会を強化改組する為め、十一月廿四日午後二時から堺市浜寺諏訪の森の中島生々庵博士の新居で理事会が開催されることになった。▼北川春巣博士は、新関西新聞社からの依頼でらくがき粋談に「水洗便所」を専門の医学の立場から執筆、十月三十日の同紙上を飾られ好評を博された▼路郎師は、山陽新聞社の懇望により同会社々事業団主催の歳末厚生義金造成書画工芸展に色紙を揮毫寄贈された▼牟田一哲博士（大阪市）は十月二十八日千葉県で開催の日本気管食通科学会及役員会に出席、今度も座長を勤め会議を進行、同地から「開業はしても学徒で生き抜こう」の句信を寄せられ、千葉大学法医学加賀谷風秋教授宅に滞泊された。▼武部香林氏（大阪市）は、東淀川郵便局の川柳講師を依嘱され、九月から毎月指導されている▼橋本緑雨氏（大阪市）は十一月十一日に十国峠、芦の湖、箱根、富士フイルム足柄工場見学、伊東に一泊、大島へと旅信があった▼築山快夢起氏（ホノルル市）からの消息によると、前山北海氏が

帰布されてからの布哇柳壇は、日本柳壇に刺戟され句会の在り方について研究をされている由。▼小倉へとち氏（西宮市）の四女峯子嬢が、電気技術者大西清氏と十一月十日神戸栄光教会で華燭の典を挙げられたおよろこび申上げる。▼丸尾潮花氏（大阪市）は、貴洲、桔梗、両氏と、十月七日天理第一病院を訪問、斗病柳友を見舞われた。▼市場没食子氏（大阪市）宅の電話が生野㊽九一三九番と変更▼明神耕生氏（高知市）は、病状の都合上十月限本会退会された。一日も早く全快、復帰を祈る。（摩）

新会員紹介

十月

加納山茶花（豊中市）
水野水花（豊中市）
以上、香林氏推薦

あやめ池大菊人形協賛川柳

主催　毎日新聞社
協賛　関西短詩文学連盟
麻生路郎選

第一席（一名）

あの菊が着てみたいとは女の子　戸井田慶太

第二席（二名）

あやめ池誰を酔わせた捨びんか　永田紀久
二階からバックミラーでおかる諾み　川端鬼酔

第三席（二名）

裏側も序に見とく菊人形　傍島静馬
引き揚げて来る赤垣は酔うて居ず　大杉春吉
酔客が菊人形にもの申し　山中つとむ

大阪市民文化祭川柳大会

市長賞秀句

貧しさを運命にせず働かん　伊勢登
灯台へもう一息の波にのり　戸田まゆみ
家計簿もつけず世帯を切り廻し　中川新歩
通訳の英語なんだか短かすぎ　正本水客
くつろぐに我が家はよろし母が居り　山添眉水
太陽が露地を素通りして昇り　不二田一三夫
プライドへ女性としての包み紙　上島ひさお
俺に似た気儘が一人生れて来　寺元貞句朗
旅費だけで済まぬ故郷へ遠ざかり　野村初甫
大阪の明日が流れる御堂筋　松原華星

金泥集

麻生葭乃選

課題「足音」

足音へ息をひそめたかくれんぼ　紫草
菊活けたまま足音も無い三日　同
足音が廊下にひゞく休校日　明美
足音が噂の主で皆だまり　千永
待ち兼ねていた足音にうろたえる　同
足音がしてから新聞見てる振り　千代美
足音が忍び忍んで来る切戸　同
砂を踏む足音式場までつづき　ひさみ
足音もあらく障子をしめて出る　きさ子
足音へ女いたずらしとうなり　阿茶
パチンコに負けた足音帰って来　同
急患があって夜中の長廊下　大杉春吉
残る月又ゆきすぎる靴の音　同
足音も派手におやつと帰って来　同
うしろから来る足音に身がしまり　冨士子
待ちかねている足音が通り過ぎ　花代子
せっかちな足音冬の音を立て　徳子
廻診の足音を待つ子のベッド　貞子
征った子の足音だけが未だ残り　花鶴美
足音へたぬき寝入りがいびき立て　白香
足音にその人柄がうかがわれ　姑
姑の足音消えて背伸びする　美舟
足音へ学童さっと席につき　たつよ
母を待つ子も足音へ泣き止める　年子
足音へふて寝している倦怠期　初穂
メーデーの足音病んで聞いている　花奈女
靴音も元気おかずも煮えたとこ　若菜
足音へ追われるように夜道行く　奈良子
アスファルト足音高くパンプスで　綾女
何度目か似てる足音通り過ぎ　登志子
病床で子の足音を聞き分ける　貴洲
足音も軽く就職告げに来る　俊江
足音を待ってはかどる針仕事　一栄
足音も御も師走の音になり　知恵美
底知れぬ闇に足音ヒタヒタと　周甫
ひそやかに秋あしおとを消してゆき　桔梗
足音にぬすみ食の子のどをつめ　トシエ
泥棒の足音もなく鳥取られ　白美
足音は隣の犬もよく知って　満寿子
足音におびえる程の闇の夜　文子
スリッパの音で朦友ききわける　美喜
引ずった靴音鍋をかけに起ち　都詩子
足音へじゃまなラジオ一寸止め　京
お帰りと立てば足音行き過ぎる　とよ
やっと寝た子へ足音に気をつかい　百合子
恋人の足音犬もちゃんと知り　風の子
午前二時父の足音気がとがめ　スミ子
足音のない病室の重苦し　清子
足音で酔の廻った事を知る　寿子
足音を驚ばりが消して鳴り　葭乃

麻生葭乃著・米田三男之介装幀
葭乃句集
福壽草
本書は川柳の母・麻生葭乃女史の異色ある作品の金字塔です。各方面から御好評をいただいて居ります。
定価二百五十円
送費　三十円
菊半型・函入
大阪市住吉区万代西五の二五
発行所　川柳雑誌社
振替口座大阪七五〇五〇番　電話住吉(代)一六〇八一

▼北川春巣博士講演「ノイローゼと川柳」は専門の医学であり、「三者会談」の清水白柳子氏は流石に老練そのものであり、木内賀氏峰の「閉会の辞」も謡曲で鍛えた音量にものを言わせ、ともに満場を圧するの感が深かった。新鋭飯田乃文夫氏が初出席ながら十題で九句入選という底力を見せられたことも特筆ものであろう。

出雲市制十五周年
川雜出雲支部三十周年　記念

・於　出雲市公会堂・

山陰川柳大會

・大会素描・

尼緑之助

十月十三日の夕刻、急行が出雲今市駅に着くと
「やあ！」
「先生！」
というあいさつで路郎先生を迎え、山陰川柳大会の序幕が開かれる。

こゝから俥は大社町へ、出雲大社の正門近い日の出館が先生の宿舎である。待ち受けていたNHK氏に依って録音が始まる。出迎えの岡垣大社所長は（鳥洋之助の筆名が通りがいい）ユーモア作家として名の高い人であるが路郎先生との対談は、どこから取っても放送に可ならざるはなしで小半時が過ぎる。

それからお二人に雲平君と小生が加わり、遅い晩さん会、話術は岡垣町長もうまい人、話題は機関銃の如く出る、路郎先生の洗練された巨砲と和やかに交錯して、さゝやか乍らも大変楽しかった。

――となったさて大会当日――

いゝ天気だ、畳敷きの大広間――この会場へ、没食子夫妻を始め無鬼、八歩、美笑、可明、山川児等の兼題選者の諸氏、全部で八十余名。会場が恰度よい埋まりようである。

路郎先生の講演、出雲市長（代理多々納助役）長岡市教育長、松江番傘の青砥可明氏等の祝辞、各々特長があってふんいきにマッチするその他予定を終えて閉会したのが午後四時二十分。

昭和二年に発足した出雲支部満三十周年を迎えた。その間に於ける支部の起伏の波はあったが、休みなき川柳活動は続いて来た。思い出は長いことに及ぶので省略するが、当初より残っているのは小生一人で、感慨も亦深いものがある。

遠来の方々、並びに初対面の人も多かったが大会の進行に気を取られている私にしては、ロクに御あいさつもせず、失礼が多かったことはやむを得なかったとしても、全く礼を失したことを深く御詫びする次第である。

大会終了後、出雲大社への御案内、懇親会等、一つ〳〵感激と感謝の余韻は長く消えそうにない。よき今後の進展を深く期しながら、そして御後援下さった各方面御出席下さった人々に深甚なる謝意を捧げる。

記念句

「力」
麻生路郎先生選

（五客）叩かれて荷馬車は力む首を振り　独仙
（同）妥結点政治の力だけ残り　蜂人
（同）腕力に負け心得る妻となり　白菊
（同）実力で勝てず極手を考える　味平
（同）国力へ見切りをつけた平和論　喜久子
（人）本当の力死なれてから判り　鼓草
（地）力ずくでも連れて戻ると父の愛　一ン十
（天）力の差それは淋しい金のこと　迷調子
（軸）力つきたか妻君の言うがまゝ
馬鹿力まず母親をあきれさせ

スマートで
着心地のよい
O.S.Kの
レディメード
株式会社 大坂商店
大阪市東区糸屋町一丁目二番地
電話東(94)1745・5563番

押売りに御用心

国弘半休

最近趣味で川柳をやっている私共の中国某地方の川柳グループに○○へ這入れと言って○○を押しつけ、柳派を持たない川柳人は正統川柳人でないように言われて折角三十五年有余の柳歴を持っているある川柳人がもう川柳をやめて仕舞おうかと思うと言って来た。勿論川雑のどのグループでもないことははっきりしているが、これ等全く川柳の押し売りでこんなことが東京や大阪の本部から指令されよう筈が無いと私は思っているが、間違いだろうか。確かにこれは地方の例えば何々○○といったところの世話ずきなご仁が川柳の本質をわきまえず、自分達の発行する句集や雑誌の販路を拡めようとして同人を募り会費を稼ごうとする手段であって、そうではない他社の川柳家には大変迷惑なことである。それどころかこのご仁は若い人たちにもちよい〳〵誘いの手を伸ばして、△△選者は選者としての人格が無いとか、××は経済力を持たないので川柳の指導者にしては不向きとか言って、折角青年が先輩として尊敬している老人にけちをつけ、グループ切り崩しをやっていると聞いては全く言語道断である。

併し川柳だって、俳句だって、お琴だって、生花だって多少流儀や家元の違いはあるし、弟子が家元を大事にする位のことは何も気に置くことは無い、川柳を趣味にやってる者には用の無いことだと言ってその時は寧ろ慰めてやったのであるが、その後或る人からそこのところから出た句集を拝見させて貰うたところ、意外にも「××地方柳界の関係図」というものが末尾ではあったが、一頁全面を使って自己の所属する柳派をピラミットの頂点にしてのせていたのでこれは又なんと素人ゴマ化しをした事をしたものだと驚いた。それ程柳派拡張に熱心なご仁が何故も少し川柳史を繙いて書かなったものかと思ったことである。

そこで私が思うことは少なく共川雑同人にだけでもこの事を知って置いて貰って、折角川柳して楽しもうとする愛好の士がこうした行き過ぎの誘惑に引掛って、つまらない義理立てに苦しむことのないようにしたいものだと念願し、敢て貴重な頁を割愛して貰ったのである。

上図のようなものを句集の中に刷り込んだとしたら、他の川柳社は当然その筆鋒を当社へ向け、この非礼、その暴慢を断乎容赦せぬであろう。この場合、柳界のなにも知らぬ素人が、自社の発展を思うのあまりの事として、なんらの抗議もなく黙過されるであろうか

謝罪広告か、すでに配布済みの句集に取消し文を送るか、何らかの誠意と陳謝の意を見せよと迫られるであろう事は間違いあるまい

この非礼極まる暴挙が事実なら正に狂人沙汰である。ところが遺憾ながら、これは広島地方に起った厳粛なる事実なのである。

半休氏の文中に○○とあるは番傘のことで「××地方柳界の関係図」とは広島地方のことなのである。「自己の所属する柳派をピラミットの頂点にして」とあるは上図のような頂きに番傘を据え、その下にわが川雑広島支部がおかれてあるのである。

選者としての人格云々等、番傘以外の選者のことであろうが、この常道を逸した暴言にはただ呆れるのほかはない。半休氏が言われるとおり正に言語同断である。

川柳人一家族をモットーとするわが川柳雑誌社に、このような刃を向けられた事に対し、痛憤措く能わざるものがこみ上げてくるのである。広島地方の川雑系川柳家よりこれが事実か、無根かの問合せが殺到してその信用問題に当社のこうむった迷惑は甚大である。

川柳向上を旗じるしにする川柳界に、かかる下劣極まるストーブリーグをもちこまれてはお互い困ろうではないか。

こゝに世の良識ある川柳家にこれを訴え、一地方に起ったことがらとはいえ、伝統ある番傘のために甚だ遺憾である事を表明するものである。

ストーブ・リーグ

不二田一三夫

大阪柳界の関係圖

浪花風味の贈物
津の清の栗おこし
道頓堀
二ツ井戸
電 ㊺ 1151—4
京阪神各百貨店
特約店にて販売

月賦のデパート
株会社 ㊐ 丸越
紳士服
婦人服
呉服
家具
靴鞄
洋装品
雑貨
良い安い買よい
10ヶ月拂
アベノ店 大阪市阿倍野区阿倍野筋三丁目六〇 電話戎㊹3957・3958
住吉店 大阪市住吉区長鋏町三五 電話㊲4985
堺店 堺市熊野町東一丁一 電話堺3587

川柳第二教室

作句指導

戸田古方

研究題「映画」

「映画」という題が作りやすかったものか、大へんな数が集ってきました。佳句を抜くのが目的でもありませんので、「うごく」句ということについて投句の中からひろいながら話してまいりましょう。

何しろ十七音字で、まとめるにはずい分な省略が必要ですし、省略によってかおり高いのもある句になる場合のある反面、舌足らずにもなり勝ちです。「うごく」ということもこの舌足らずに関係がありますし、しかし、「うごく」ように見えて映画の映画らしいところをズバリと衝いているものもないではありません。

女からきめた映画へさからわず　錦花

結局は妻の好みの映画館　みちる

強いようで弱い男と弱いようで強い女を並べて川柳味を出したまで映画がしるこになっても百貨店になっても差支えありません。

親は松ちゃん子は錦ちゃんへ笑をあげ　どんたく

スクリーンの最眞へ年のズレを知り　恵二朗

この二句も年齢のズレの面白さをテーマにしたもので松ちゃんは尾上松之助、錦ちゃんは今を時めく中村錦之助、その眼玉の松ちゃんを御存知ない若い読者もあることでしょう。

映画出てしるこに甘い筈を追い　忠

これはモンタジューです。言葉の遊戯的なところもありますが、「甘い」という言葉を仲介としてこの場合映画としるこはおさまるべき座におさまっています。

良妻しは別で儲がさきに立ち　弘朗

結ばれてホットしたのか席を空け　花車

両方とも映画という文字はつかっていません。勿論映画という語を句の中に表さないでもいいのですが、この場合は映画という文字も出ていないし、句の中にも映画であるというきめ手もありません。太陽族的不健康は何も映画にだけあるのではありませんし、結ばれてホットするということと、席を空けるのの間には何か関係がありそうですが、そうした席を空けるのはこれも映画に限ったわけではありません。開演中に席を立つようなことは席が指定になっている芝居の方にありそうに思えます。

しんみりと泣いてる暇のない映画　静観堂

映画はこのように手っとり早く、今いったことを追い打ちしているようです。

ネオンの灯今見たような恋になり　初甫

この句も映画を伏せた表現がつかわれています。ネオンという近代感覚がやはり映画をはっきり想像させるといえばさせますが動くといえば動くといえないこともありません。

香港もアモイも見せて映画すみ　豊年

北京でも上海でもニューヨークでもロンドンでもかまわないわけですが、居ながらに活発に動く異国の風物に接することの出来るも映画ならではと思わせます。

美しいスイスを映画で見せてくれ　義夫

「わんわん物語」といっしょに見せてくれたデズニーシリーズの「スイス」はすばらしいものの一つでした。

映画見て恋はお芝居めいてくる　文平

恋をする道を映画に習って来　柳叟

映画の恋は若い人々をずい分刺激することでしょう。映画と恋愛道とはたしかに現代的センスでむすびつけ得られるものですが、そんな恋がはたして現実にいくつもあるでしょうか、それが案外めずらしくないとすれば、それをアプレというのでしょう。映画の影響のおそろしさも感じさせます。

スクリーンの戀へおぼこが上京し　真路

こんなことにもなります。これらの句を映画以外の小説か何かにおきかえておきかえられないことはありませんが、マス、コンミュニケーション的真理は認めないわけにはゆきますまい。

映画程ロマンスにない療養所　千永

共学の学校や修道院などでもありそうなことですが、療養所が一番よく利いてるとも思われます。

片想い映画の筋へ泣いてみる　美舟

身につまされたところでしょう。この句のあつかわれている映画が決定的な位置におかれているかどうか。

母映画で泣いて帰って嬉いびり　実男

「曾我通家に泣く涙あり借さぬなり」という句がありましたが同巧異曲でしょうか。しかしこの句より抜巧はすぐれているとはいえません。

スクリーンの主役絶対に死なぬもの　四呂平

母ものと同じ程度のメロドラマでしょう。

大げさに無声映画が持ち出され　微酔

時々はノスタルジァみたいにサイレントがみたくなったりします、昭和二、三年頃サイレントに映画芸術の完成的秀作を見つけて来た私ですもの、しかし黒白映画やスタンダードサイズすら喰い足りないと感じるようになっています今日此頃、サイレントに理窟をこねて見たところで、大した感激がないのかもしれません。

映画の話へこども案外知っている　登

「映画の話へ」の「へ」はとった方がよさそうです。いくらこまっ

紳士服
松崎洋服店
淀屋橋電停前
TEL㉓3417—9

しゃくれても子供は子供、終戦間無しに出来た作品すらほとんど知らないのです。まして映画史においておや、所詮映画通には程遠いものでしょう。

ニュース映画見てから父の気も変り　幽谷

おやじの見るのはニュース映画ぐらいのものか、そのニュースの一コマに思いがけなく感激して瓢箪から駒が出る見たいなことが起りかねないものでもありません。見るべきものは見せるべきです。

三十過ぎ映画の学割顔見られ　柳香

映画俳優笑った顔で覚えられ　我利婆

シネスコは大きいとだけ聞いて病み　一鶴

映画を主題にするというより、つまみ的役割をはたしているにすぎません。それだけに動く率も大きそうです。

日曜日映画に邪魔な人が来る　周甫

巡回映画猫に留守たのんで　桐生子

やはり動くのですが映画の軽さをいたゞきます、ことに猫の留守の句には引かれるものがありました。

ごあいさつ聞く耳もたぬロハ映画　八九寸

「聞く耳もたぬ」とひらき直っていますが、尻すぼみにロハ映画とうけているのが、ぎこちなさの中に味があります。

映画から出て現実の街の音　牧人

映画館出れば靜かに虫が鳴き　堯二

やゝ具体的要素にかけていますがこうした句はいろいろ考えた末こゝに落ちつくことである安心さえ感じます。館を出たところで、研究の方も「ザ、エンド」といたしましょう。

研究題「にせもの」
（〆切）十二月十五日
（発表）二月号紙上
（宛名）
豊中市本町三丁目二〇一
戸田古方

選者に云う

菊沢小松園

近頃は暫らく聞かれなくなったが未だ時々句会の選者で盲選で恐れ入りますと言われる人がある、私は此の言葉を聞く度に変な気持になる、言われてる御本人は平気で寧ろ謙虚な気持で礼儀正しい奥床しい心算か知らんが錯覚も甚しい、句主が皆一生懸命に一句に生命を打ち込んで創ったものとすれば斯うした気持は寧ろ句主に対する冒瀆にならぬかと思う、

選は盤石の自信を持って為すべきもので夢々怠そかに為べすきでない、自信がなければ心潔く初めから辞退すべきではないかと思う、活殺自在の選者の位置は決して軽々しく自信のないものであってはならない。一句の生命を盲選の盲ら滅法にやられたり妄選のみだらにやられては句主が泣く、中には歴々しく紙上に活字で刷って居られるのでは正に噴飯ものである。謝選とあるのも愚なものである、選を託されて感謝された謝選なのか或いは又出鱈目な選なのであやまる意味の謝選なのかは知らぬが選は誰々選で結構余計な気を使わす言葉は入れぬことである。

選者は自信と責任を持ってと、此れが私の言いたいことである。本当の盲選の人は盲選とけである。（三十一年十月十五日）

あゝ秋香

木村十悟

永い間喘息で病臥されていた秋香氏は十月九日行年六十四才で亡くなられた、戦時中はB29の爆撃下、体当り防衛で町を護りぬき鬼町会長として表彰もされ勇名を馳せられたものである。

句会場の西光寺へものの二丁とない自宅から喘息に喘ぎながら、小一時間もかかって出席されたことなど想うと胸が痛くなる。

秋香句抄

ベン先に恋の焔を突きさして
吃りとは知らず鶏寄って来る
友情のわかった時は遅かりし
生き馬の目を抜く街にまだ荒地
欠損の続くも知らぬ顧問さん
茸の香に若鶏の味灘の味
義理の有る母には言えない今朝の夢

一万円今昔感

須崎豆秋

百円札百枚よんだ指の音　愛舟

配給のつりへ五銭の汚れよう　修三

五円札出せば世辞言うたたき売り　ひさし

五円札貸す友もなく爪を剪る　久米雄

五円札帯の財布はたたかれる　山雨楼

一万円札が出る今日、むかしと言ってもつい六七年前までは、五銭札というのがあったり、五円札ごときが威張っていたり　一万円へ百円札を百ぺんもよまなければならなかったことなどを振り返えると、今昔の感が深いではありませんか。（註、百円札と五銭札の二句は、昭和二十四年、五円札の句はそれよりズッと前の句です）

★

一万円フフンと云って草に寝る　路郎

一万円位なかなか儲からず　冷刀

一万田一万札はよい記念　白翁居

物云わす一万円がおかしうて　生々庵

一万円位と妓承知せず　摩天郎

残高が一万円の淋しさよ　文蝶

腰弁の一万円に養われ　南風楼

慰藉料は一万円か子が生れ　万楽

他人さまの一万円を軽う云い　凡九郎

「一万円位なかなか儲からす」の時代から、「一万円位と妓承知せず」への一万円の価値を顧みることも面白いでしょう。

昭和十一年に萩の茶屋あたりに居たルンペンが、一万円も貯金していたというので、大きい話題になったことがあります。当時、葭乃奥さんの御病気で川雑受難の際でしたが玉出で先生と艸楽、かほる、豆秋の四人で「一万円句会」というのをやって、四頁の川雑七月号を出したことがありました（昭和十一年七月号御参照）

舶來品 食料品 化粧品・雑貨 機械類 の御用は
ボン商會へ
大阪市南区高津町十番町31番地
（道頓堀・堺筋東入浜側）
電話 ㊟7016・8563

雑筆 春秋

鰻のきも

松江 梅里

梅里の店それは皆さんも御承知のアベノ橋近鉄地下食通街のすし店大方である。近頃は大万川柳の店として好評を戴いている。或るお客が曰くすしはまずいというても川柳はうまいと褒めないとこゝの親爺の御機嫌を害うとまで云われる程、大方はすしよりもむしろ川柳に依って広く知られて来た。尤もこれには麻生路郎先生選と云う金看板の光っていることを忘れてはいけない。発表の日等早朝より態々入選句の掲示だけを見に来られる。平常は余り店へ顔を出さない私もその日は早朝より出向いて、来られた人々にお茶の接待をする。商売気を離れて実に愉快である。今日は少し川柳を通してすし店の楽屋話を聞いて戴こう。

私の経営するすし店は決して一流ではない。二流と三流の合いの子位だろう、私の狙いは上品な大衆店所謂柄がよくて安くてうまい店、しかし云うべくして至難なことであるが絶えず努力はしている。お客と云うものはまことに結構なものでまた反面気まゝなものである。有難いものは何んと云っても、常連である満員になれば常連は席を空けてくれるし時には茶も酌んでくれる、私の句に「たて込んだ時の常連ほっとかれ」それでいて却って喜んでくれる。実に涙の出るほど有難い。すしを喰べに行って例えば鳥貝握ってんかと云うと、イーさん鳥貝やめときなはれ赤貝やったら新しおますと云われるようになれば大したもの。相当会費払ろてる証拠。中には一応通がっているがその実何も知らないお客もある、例えばトロ（鮪の腹身で桜色の斑点のある脂身で値は倍も高い）を握ってんかと仰言る、丁度その時トロが売切れたので赤身の少し浅い色をしたのを出したが知らん顔をして御座る。やっぱりトロはうまいなーなどゝ云われて苦笑させられることがある。トロと云えば鮪の代名詞と心得てるらしい、最近は殆どトロを知らない人はないが時たまそんなお客もある。そうかと思うともっとえゝトロないか車えび握ってんかと僅か十円のすしに無理な注文をつけられる、早速短冊に「十円のすしでトロ呉れエビ呉れの」と書いて貼ると親爺きついこと書きよったなと笑いながらこの短冊貰ろていくでと、さっさと出ていく。翌日今度は友人を連れて来てそのことを自慢話にしてくれる、嬉しいものである。一番困ることはたて込んだ時にすしばかり注文してくれると良いのだが意地の悪いもので甲のお客は赤出し二つ作ってくれと云うと、その連れの人は俺れはすましの吸ものにしてくれと云う。こうなると赤出しを一つ作ってから別にすましを一つ作らねばならない。すると乙のお客がそのあとへわしも赤出ししてんかとくる。もう一寸早く云うてくれたら一緒に出来るのになーと思うが文句は云えない。左から上り（茶）くれ酒くれ右からすしくれ刺身くれとせきたてられる、つい早く渡そうとして出せば燗がぬるいとか茶が出てない。わさび抜きやと云うたのにとあちこちから苦情が出る。（註わさびは握る時手癖になっているので抜きだなと思っていてもつい指がわさびの方へいく却ってわさびをつけることが調子がよくて捗るからである）三味線でも同じことが云える、芸妓や仲居がお客の唄に合わして弾いているが今本調子ものゝ都々逸をやっている次に槍さびでも唄えば同じ本調子であるが、春雨（二上り）を頼む、あとびんほつ（二上り）を唄う、お富さんが出てくる酒呑むな〳〵が出る酒は呑め〳〵と黒田節の応酬がある、調子などお構いなしの矢継早。弾き手は汗だくのきり〳〵舞。遅れると俺れの唄によう合わさん下手糞だと片付けられる。いかに商売とは云え女も決して楽じゃない。そんなことを一々気にして呑んでては面白くはないけれど一寸した心遣いをそれらの職業人は非常に喜ぶものである。

私の叔父が今から二十年程前うなぎのきもがうまいと人にすゝめられ初めて食った。皆さんも御承知と思うがうなぎのきもにはにがを玉と称する青い袋状のものがくっついている、これはにがいので調理するときに必ず切り取っておくことになっているところが、どうしたはずみかにが玉のとれてないのが運悪く初めて食べる叔父に当った、好きなものなら大したこともないのだが何しろ気持悪々食べたところへにが玉を噛んだので忽ち吐出して失った。それ以来うなぎのきもは絶対食わなかった、然るに最近眼を患ってうなぎのきもが最もよいと奨められ背に腹はかえられず食べる気になった、生ではとても食えんので。きも煮にして眼をつむって食ったがとても美味かったのでお代りをくれと云い出した、やがてひらきたてのうなぎの生きもを貪ぼるように食べんなうまいものを何故今日迄食わなかったかと頻りに後悔していた。お蔭で眼もすっかりよくなって非常に喜んでいる。川柳もうなぎのきもとおんなじだと私はつく〳〵思う初めて川柳をやって運悪くにが玉（没）を食ってこんなのは食えんと止めてしまう。ところが何年かの後また人に奨められて句会に出て、選に入りそれが病みつきになって何故こんないゝ趣味をもっと早くやっておかなかったかと云う人が相当ある。結局は指導者の問題である、若しその時にが玉を取ってないのが運悪く当ったのだからもう一度別のものを食べてみよと注意する人がいたら或ほうなぎのきもはそのまゝ好きになっていたのかも知れない、川柳も亦むべなるかなである。

川柳の緑風会的考察

八杉 風車

参議院選挙が終ってみると意外に緑風会の敗退が目立った。政界に緑の風を吹きこむ意気ごみで結成されたというその会は、むざんな敗退を示したのだ。二大政党の中にはさまれてのその是々非々主義はおのずと招いた結果になったと云わざるを得ないだろう。自らがもっと勉強しその主義に徹してその真価を広く問わざらねばます〳〵衰えるのは必然であろう。川柳に於ても然りと思います。路郎先生が生命ある句を創れといわれる根源は、緑風会のそれと似てると思います。俳句短歌等短詩型文

芸の中にあっての使命は軽々しいものではありません。

今や川柳は全国的に隆盛をしめしている様です。それは先輩諸先生の黙々として歩み越された賜であると思います。

よい句を創らんがために恰も自由主義者が官憲の圧迫に抗しつゝも今日を築き上げたに似たものをみるのであります。俳句はかって第二芸術論たるものが起って一波瀾を起しました。それは一応治まったかの如く今日に及んでいるのですが自民党のそれに似て矢張りくすぶってるのではないでしょうか。刻々移りゆく時代の推移に抗して正に懸命ではないでしょうか。枯淡閑寂趣味は有閑人のなぐさみものになってしまいました。その現れが最近然りとこれらの俳句の人事性を提唱していることも一つであると思います。

そこで川柳の人間諷詠は今更俳句の云々より一歩先んじていると思うのですが、かっての乱脈時代低俗川柳のバッコによってその信が奈落に落ちてその信用バンカイは一に吾等の絲風会的双肩にかゝっていると云っても過言ではないと思います。生命ある句を創って一般庶民に親まれる川柳になると云うことでありますが、ウットウしいこの時代感覚を何かの形で吐露する、カッパする、諷刺する、のは川柳を於て外になく旺盛な批判精神の発露であると思います。

こゝに於て私は飽くまで川柳は川柳独特の要素によってその詩的表現の無季俳句的になるのを警戒して絲風会的役割によって川柳の金字塔を打建てるべく、我が師路郎先生が叫ばれる生命ある句を創るために邁進すべく心掛けねばいけないと思います。

一生に一句いのちの句が欲しい

風車

あすなろの歌

久保和友

「あすなろ」という木はいくらあせってもあがいても檜になろう檜になろうと思っていてもなれない木だということを映画化された井上靖の小説で教えられ、そのたくましさが何となく気になりひかれるような気持でその映画「あすなろ物語」を観た。話は三部にわかれていて意気地ない少年が不幸のなかにいろいろなタイプの人の手によってより強く生きていく話であったがそのストリーに私は何かひかれるものがあった。これは意識して観たのだが私も同じようにして生きてきたのではなかったのか。これはうぬぼれでもない。人間は時として共通の観念を植えつけられるのではあるが。私が川柳というものにひかれたのも何かによりかゝりたいからであった。この世の中が小説家の高見順がいみじくも言うように「一回だけの招待」であるとすると二度とこの世に生きられないこの人生を生きてる間に生きるあかしのものをたてておきたい。それが他の文芸であってもよいが私には川柳が一番ふさわしいような気がしたからであった。ある意味では川柳は反逆の文学であり遊びの文学である。遊びという言葉を二流にとられても困るが本当に人生を遊んだ人こそ人生の達人であると思う。これはいくたの先輩が教えてくれた。「あすなろ物語」の主人公のように本当の川柳をつくろうつくろうと思いながらつくれない私ではあるが。川柳というものは病みつきになったらしめたものだと思う。私がもう一回句集を出すとしたらやはり人間が生きていた弱々しい歴史がひそむものになると思う。これは誰でも同じかも知れぬが強くふてぶてしく生きられない陽蔭の人間が陽のあたる場所へ出ようとあがいているその弱さ、他の人はとっくに卒業している筈なのに。生きるあかしの川柳がそれになって当然ではあるが楽しみたいと思う。（台風一過の晴れた日に）

風吹けば
麦稈が腐る

高木澁柑

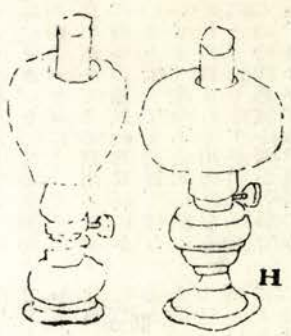
当るも八卦当らぬも八卦と云われる気象台の天気予報が大変気になる。今日この頃である。麦稈帽子などの材料である麦稈真田を編むのは私の地方で盛んな副業であり原料の麦稈を採るのに麦稈採取用と普通麦の種類はあるが、普通種でも青刈りすれば結構世話はないと。麦秋期には年中行事の一つとして各戸競って麦稈の晒白と乾燥に狂奔するのであるが、麦の成熟を待たず青い麦を刈り取って、穂はこぎ落して乾燥調製すれば貴重な食糧となり、稈は一晩中硫黄で晒白し乾燥すれば立派な麦稈真田原料となる。その間連続三日間位の晴朗なお天気が望ましいのである。まあ丸一日位晴天で乾せば稍々可なりであるが半日位の乾燥ではどうにもならないのでよいお天気の日を見つけて早朝から一刻を争って田面一杯拡げるのである。雨に逢う懸念があれば早速仕舞い込み晴天と見れば又出して乾かすのが並大ていではない。

大変な手数を要する作業であるがその日のお天気工合を気にしながら一家総動員で働らくのである。扨てわが並木会という川柳研究グループは輪番に会員宅を訪問し運座に興趣尽きざるところ深更に及ぶことも屢々であるが偶々木山古庵氏宅での例会に欠席したばかりに麦稈が腐ったのである。梅雨が早く来ると云う曇りがちな午後を妻は一生懸命麦刈りをした、そして穂をこぎ落した麦稈を小束にして適当な身幹に根元の部分を切り放ち、大きい束にして晒小屋へ搬入した夕方に硫黄へ点火して置けば翌朝までには完全燃焼するが夜中一度見廻るがよろしい。夜中一度見廻るには古庵氏宅の並木会へ列席すれば時間が丁度よろしい。時間が丁度よろしいのに私は屋の疲れと共につい横着して寝込んでしまった。翌朝晒白小屋へ行って見ると炊き口を締め過ぎて通風工合が悪かったのか盛んに燃えているので仕方なく半日遅らせて搬出する計画をたてた。その日は早朝から珍らしい晴天でそよ吹き渡る青嵐の工合はてっきり夏型気圧配置とかで晴天が続くかと思った。

午后のラジオ放送は雨と云わなかった。明日の天気は曇り時々晴と報じたのでそれを念じながら安心と不安と半分半分の気持でぐっすり眠った。今日早朝から終日の晴天に恵まれた麦稈であれば恐らく夕方には仕舞い込んだであろうその夜の夜明け前から降り出してどうすることもできず、終日のどしゃ降りにあって折角の晒白した半日干しの麦稈は半分腐った。風吹けば麦稈が腐るとも云えるし、並木会へ欠席したから麦稈が腐ったとも云えるであろう。桶屋が儲からなかったことだけは事実である。

お酒の前後に
メルチオB12錠
二日酔・悪酔
肝臓疾患に
25錠55錠100錠
武田薬品

一路集



名門

川村好郎選

名門の生れが検挙を手間どらせ　厳
名門をねらい予備校へまだ通い　五茶
墓石の高さも名門見栄があり　同
名門としての〇の数並べ　水堂
名門へ媚ることなく父貧し　味平
ぼんぼんに名門の荷が重う過ぎ　笑太
名門の一角邪恋の火にくずれ　恵二朗
暦育ちどこかのんびり抜けており　幸路
名門が世が世ならばと愚痴列べ　夜潮
名門の落いん日蔭の母と住み　井蛙
名門に生れ世襲の回り椅子　同
ウンウンと名門云い値で買ってゆき　光郎
名門の雅筆家宝の額になり　同
名門がまだ巾が効くおらが村　微酔
名門に上手に寄附を断られ　雄々
名門は養子がつぐく遺産あり　英断
名門を芸一代でつくり上げ　柳叟
好き合うた二人に名門邪魔になり　陽子
名門の体面借金して支え　同
名門から貰うた嫁の尻重し　同
名門と云われて寄附が大きすぎ　同
名門の破産も知らぬ庭の石　淀月
名門の暮しを攻める資産税　同
市長さだ名門の出不服あり　豊年
名門の当主へ絶えぬスキャンダル　十九平
名門の後目誰もが寄りつかず　文平
名門に生れ気品のみ高くトン坊
名門を継ぐ気苦労の舞扇　葉光
名門の愚息赤旗振っており　多久志
名門のだまされ易い眼鼻だち　香林
名門が未亡人の座を強いる　春雄
名門という名が鼻につく無力　高志
名門も先祖たゞせばあっけなし　雄声
名門の流石逆転勝ちとなり　不二
名門が一枚入って呼ぶ人気　九呂平
名門だから新聞社にも気を使い　圭水
名門の焼香一日中つゞき　幽谷
白足袋も名門らしうよく似合い　同
名門の出万年係長　八九寸
名門の生れが今日も汗に生き　隆文
名門を意識している顔が行き　むじな
犬牛馬の世界にもある名門　七面山
名門の相手みくびる癖抜けず　古心
名門と遺産を継いで老いただけ　可十
名門の教えに耐える血がにじみ　義夫
名門に生れ屋台をまだ知らず　多久志
(佳)名門に格式がある勝手口　代仕男
(佳)因習が護れて名門悲なく　辰始
(佳)名門の父を知らないまゝ育ち　黒天子
(佳)名門の噂を名門訊きたがり　光郎
(佳)名門の匂い切り下げ髪しずか　恵二朗
(人)名門へ口止料がとりかこみ　芳仙
(地)名門という親類が他人めき　幽谷
(天)落ちぶれていて名門のこせつかず　香林

銀行

若本多久志選

銀行に縁もゆかりもない生活　錦花
金のある人に銀行貸したがり　進之助
銀行で守衛一人が髭をつけ　幸路
銀行は目立たぬとこに非常ベル　代仕男
大銀行一流会社へ焦つかせ　静馬
銀行に預金も借りもない生活　古意知
銀行を借りる手マダムは媚をみせ　光郎
銀行で借るには信用チト足らず　井蛙
銀行を出て来たとこから尾行され　庸佑
銀行のお隣りですと教えられ　同
帯封の儘銀行を信じ切り　牧人
銀行に勤めケチケチした暮し　雄々
銀行を聞いて乗り気になる縁談　陽子
銀行に勤めて札を汚ながり　雷山
町内の寄附銀行が筆始め　十九平
行員が皆手を挙げた非常ベル　芳仙
銀行へ師走の風に押されて来　同
月給は行員とても待ち遠し　自楽
銀行員服まで札の匂いがし　藤波
銀行に人情なんかあるものか　一ン十
銀行へ借金に来た高級車　五茶
戦災のあれから縁のない銀行　七面山
子供銀行支店長の子が支店長　可十
銀行も心配壺に金を貯め　古心
銀行の前で自転車又いかれ　貴美
銀行と知らず雀は巣を作り　同
銀行へゆかずゴルフで事が済み　香林
銀行の軒も祭りの紅提灯　不二
銀行へボンと預けて夢がさめ　圭水
銀行へ今日は預ける顔で行く　同
銀行員ならと母だけ乗り気なり　味平
銀行で金を借りるにも酒がいり　笹舟
現送の行員さりげなく鞄さげ　恵二朗
小抱いて銀行へくる生活むき　葉光
銀行も間屋も倒し夜逃げする　箔川
(秀)融手とは銀行とうに知っており　高志
(秀)銀行へ鱗のついたまゝ預け　実男
(秀)万全を期して銀行貸してくれ　義夫
(軸)借りに行くバランス別に作つき

いのちある句を創れ

花地物語

投稿規定 ▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月二〇日▼投稿先本社宛

本社 文化の夕句會（大阪市）

十一月七日　午後六時　於 光明寺

英仏、ソ連の大国が兵を動かし、外は血なまぐさい風が吹き荒さぶのに、われわれは文化の夕に集いして川柳するよろこびをここにくり展げる。

円熟味を増す戸田古方氏の句評は、この戦乱の話から暴力の句へ移り、更に伝統と文明の相剋を、十悟、恒雄、多久志、一三夫、雷山、冨士子の句を引用され、更に又専門の歴史に転じ古方氏最近の大ヒットに満場は酔う。

路郎師の柳話は文化勲章受賞者の銓衡委員をされた時の話を、いつものユーモラスな舌に乗せて、その委員会風景を覗かせてくださる。これが川柳の選とうまく結びつき、膝を打たせ手を叩かせ大家絶妙の独壇上である。本年の市民川柳大会の当番である「さつき川柳社」の坂澄風氏の重体を痛く心され、この際友愛精神を以て「さつき川柳社」に応援するよう人情家麻生路郎を丸出しにされる。

ようやく膝に冷めたさが覚えるころ席兼題が終り、文化の夕の不朽洞賞杯は、西尾栞氏が握られた。時に九時。（F）

出席者＝路郎・乃文夫・一三夫・凡九郎・淡舟・堰子・庸佑・文蝶・潮花・甲浦・紫香・瓢太・いさむ・狂二・凡茶・省三・水茶・山舟・貞女・いわを・薫風子・十悟・多久志・三司・文秋・どんたく・立児・好郎・晃・貞句朗・六竜子・一ン十・きさ子・晴峯・摩天郎・古方・水客・牧人・静馬・幽王・水堂・利武・晴雄・梅里・永断・没食子・恒明・与呂志・茶仏・一瓢・静静・高志・豆秋・香林・栞・土佐太郎・進之助・歌都路・柳宏子・白水・花村・へとち・白柳子・葭乃

兼題「交渉」　麻生路郎選

交渉をされてるほうは爪を噛み　一三夫
交渉は暗黙の間に半ば出来　与呂志
交渉のピリオドと云うお茶を汲み　省三
交渉の背に赤旗の声強し　利武
呵々大笑をして交渉をまとめたり　紫香
交渉のヤマで目と目がぶっつかり　柳宏子
もう百円値切る交渉手間を取り　文秋
交渉が妥結女将へベルが鳴り　香林
条文のたった一字のことでもめ　薫風子
いかけやと交渉してる鍋の底　晴峯
交渉へ個人の義理は眼をつむり　水堂
交渉の余地を残しておい酒だ　多久志
癪だけどボスで纏るから不思議　満秋
交渉へ四角四面な顔をする　知恵美
交渉がすんで脇そく引くあぐら　歌都路
交渉の下交渉の準備会　高志
交渉の首尾に尾ひれをつけて告げ　歌都路
交渉を飲めぬ幹事がまとめて来　きさ子
交渉へ親分顔を見せただけ　貞女
冗談を云い〳〵交渉纏めて来　静馬
恒例のストはアルファーでクリをつけ　乃文夫
交渉の仕方も斜陽族らしく　古方
交渉へさそいの水もさしてみる　凡九郎
交渉のもつれ羽織をはね返し　山舟
交渉は年にも物を云わせる気　一瓢
交渉はもつれたまゝの灯がこもり　進之助
尻まくる腹で交渉出かけたり　没食子
交渉ののらりくらりへ根が尽き　牧人
団交へ会社側から寿司が出る　好郎
ノホホンとして交渉は人まかせ　一瓢
日ソ交渉人はふえても土地がへり　山舟
交渉へまず実弾と云う見舞　三司
瓢箪鯰だが上手に交渉し　阿茶
交渉へ内助も少し認められ　知恵美
交渉の中途でボスが水をさし　美舟
交渉の間妓は追い出され　潮花
冗談で爆笑させて話きめ　八九寸
一にも二にも三にも押せと組合旗　六竜子
交渉へ女房に入れ知恵されて出る　花車
交渉は成立ホテルの灯が赤い　進之助
もちっとの慾交渉をこじれさせ　満秋
歯車のごとき交渉とはなりぬ　水客
交渉に借りた六法と寝てしまい　花車
交渉の不調へお茶をがぶと飲み　山舟
交渉はギブアンドテイクの腹でいる　栞
交渉もこゝまで来ては折れるだけ　路郎
交渉に怒って帰ったとは云わず　同

兼題「下積み」　西尾栞選

もう辞めるやめると下積みまだ辞めず　多久志
下積みがコツ〳〵〳〵と穴をあけ　水茶
下積みは神を信じて疑わず　幽王
学歴が下積みと云う名へ甘んずる　六竜子
怒らない様に下積み慣らされる　文秋
下積みのこれはと思う趣味を持ち　水客
下積みへ手も足も出ぬ誘いが来　一瓢
下積みの椅子の固さが痔にこたえ　晃
下積みの一人汚職へとり残し　水茶
下積みの今年も無遅刻無欠勤　立児
下積みに生きて自慢の子を育て　晴峯
下積みと呼んで社長の私事にふれ　水茶
下積みの見果てぬ夢を子に託し　どんたく
下積みを認識された頃に死に　幽王
下積みの漸く人間出来かゝり　いわを
下積みを読ます鶏太のほがらかさ　凡茶
下積みでいてもゲーテを読みこなし　香林
下積みの案外芯のある意見　いさむ
下積みのモヤ〳〵握り潰されて　一瓢
下積みへ耳の遠さがひどくなり　きさ子
下積みの菊が金牌賞をとり　立児
表彰の一人下積みから見つけ　十悟
下積みの無口がいっそあわれなり　栞

兼題「興奮」　松江梅里選

興奮をかくす煙草に火が付かず　美舟
興奮のマイクへ伸びたホームラン　省三
興奮をしてるマイクは汗をかき　いさむ
こきおろしておいて興奮しなさんな　八九寸
興奮をしてるヌードのかぶりつき　豆秋
興奮をおさえ切れない手の震え　潮花
興奮がさめた頃だと意見され　貞句朗
興奮をすれば又死にますの出て行くの　幽王
興奮を静めて萩の花と居る　瓢太
興奮は何も云わない一文字　進之助
興奮をなだめ玄関まで送り　潮花
興奮へインテリと云う背をむけ　立児
舞鶴は興奮させたり泣かせたり　一三夫
興奮をすると養子をつい忘れ　水堂
興奮は未だ醒めやらぬ手の温み　やなぎ
興ってましたねと司会者如才なく　好郎
興奮が冷めた夜明けの置時計　千里
興奮の寝返りをして夜を起き　いさむ
興奮の膝で小猫も落着けず　知恵美
興奮もおさまったらしいインパクト　阿茶

犬縺いた動悸で辻を曲り終え　水客
興奮を誘うグラスの青い酒　潮花
興奮とカメラ帽子で軽く受け　甲浦
興奮の余波は机の花が落ち　茶仏
取巻きの方が勝手に興奮し　柳宏子
興奮が慚愧に変わる留置場　好郎
興奮のルツボ大関揺りもどし　花車
興奮の文男静代になだめられ　歌都路
ネクタイが結べぬ程に興奮し　一ン十
限界のある忍耐へ火の怒り　進之助
興奮をひきさく様にテープ切れ　狂二
興奮のくすりを呑んでいる初老　豆秋
興奮と帰った駅の優勝旗　凡茶
興奮の二度と帰れぬ椅子を蹴り　一瓢
興奮の渦しわ苦茶にされて立ち　茶仏
興奮は社長を敵に廻してた　恒明
興奮をすると口より手が早く　梅里

兼題「他人」　**八木翠天郎選**

慰めの美辞で済ませている他人　白水
出戻りの荷のぞろ〳〵と他人の眼　香林
列車事故他人ばかりでほっとする　文秋
他人事と思えませんと共に泣き　庸佑
他人冷たく病床の窓を過ぎ　香林
音吐朗々赤の他人へ読む弔辞　一瓢
ひとの気も知らず他人になれと云う　省三
他人とはつめたきひざきもつものよ　古方
孫程も違って他人の気をもませ　一求
他人なら叱りはせぬと叱られる　花村
死んだかそうかと他人云ったきり　豆秋
他人みな楽観的な事を云う　満秋
もう他人だぞと手切金わたし　豆秋
一昔前は他人であった妻　進之助
他人とは云わしませぬこ子を並べ　潮花
世話好きが他人の事で苦労して　白水
これからは他人でまねこ印を押し　満秋
他人ともつかず二号ともつかず　高志
他人とは思えず肚を許し合い　十悟
他人とは思えぬレターを妻見付け　幽王
事こゝで他人の力借るときめ　いさむ
大火事を面白がっている他人　豆秋
他人とは思うてまへんさっねられる　千里
他人さまが賞める夫を不思議がり　牧人
元の名にかえり貴方こもう云わず　三司
戸籍課は俺の女房がまだ他人　幽王
水枕他人ばかりのなかの音　水客
ほっといてほしい他人がようかまい　多久志
他人とは思っておらんさまた叱り　好郎
他人よりひどいしうちの方と添い　潮花
女房と握手をすれば他人めき　茶
他人ですわと笑うて叩くコンパクト　摩天郎

兼題「グループ」　**富岡淡舟選**

グループを又変えている女の子　狂二
グループへ金のあるのは寄りつかず　一三夫
グループの三人寄れば梯子酒　いさむ
二次会へ行くグループはきまっこり　多久志
グループはコーヒだけで詩を論じ　豆秋
役員の話でグループもめてくる　静静
呑めないくせにグループの一人なり　茶
グループを離れ静かに詩集読み　晴峯
奥さんのグループみ〻豆だけで済み　恒明
グループのサインで意見一致する　牧人
ひと儲けしたそなグループ一人欠け　瓢子
グループの一人はすねて猪口を伏せ　六竜子
割勘と決めてグループ気が揃い　文蝶
グループで大器晩成型と云う　水客
グループの秘密は女から崩れ　茶仏
性格が違いグループ仲がよし　紫香
グループの中の女王が先に婚き　三司
グループに一人ごてるのも混り　水堂
おつちよこちよいどのグループにも顔を出し　一三夫
悪い時だけはグループ呼び出され　潮花
グループで頼りないのがあてにされ　庸佑
グループのいつちまめなが先に死に　摩天郎
グループの中に共産党も居りいわを　文秋
グループへもう栄転が知れわたり　文秋
規約などないグループの気が揃い　凡茶
グループの会費は小さく発足す　きさ子

席題「秘訣」　**長谷川三司選**

円満の秘訣をスター記事にされ　土佐太郎
バーテンの秘訣グラスに盛りあげる　潮花
成功の秘訣読んでるガード下　好郎
誠実が秘訣と恩人くりかえし　好郎
相伝の秘訣も科学で割り出され　多久志
競輪の秘訣赤鉛筆が要り　文蝶
秘訣より此の腕だずと見せて居　貞句朗
秘訣とはそんなもんかと笑い合い　文蝶
うっかりと秘訣しゃべって出しぬかれ　庸佑
言訳の秘訣を聞いている浮気　文秋
秘訣あるらしいと思う蛸の味　豆秋
体得をしないと秘訣にふれもせず　瓢太
この秘訣一寸一升さげて来い　山舟
世渡りの秘訣を笑う玉子酒　水客
秘訣などないと内緒で儲けてい　紫香
出世する秘訣と云われ碁の相手　淡舟
おもむろに聞けばなんでもない秘訣　淡舟
世渡りの秘訣は猪口をおいて聞き　梅里
家元もこゝが秘訣だとは云わず　摩天郎
誰にでも出来る秘訣で効めなく　水堂
広告は一夜で美人になる秘訣　貞女
世渡りの秘訣を酒に結びつけ　茶仏
美人になる秘訣を聞けばねろこ云う　瓢太
秘訣などおまっかいなこたくるしく　狂二
惚れさせる秘訣やっぱり金が要り　豆秋
上達の秘訣下男として探り　永断
秘訣とは別に努力の汗に生き　好郎
出世する秘訣は飲めと教えられ　淡舟
こゝいらで買わせる秘訣はポンこまけ　紫香
勿体をつけた秘訣は水を交ぜ　梅里
勝つ秘訣などと競輪負けつゞけ　三司

席題「得意先」　**真鍋一瓢選**

女中から先ずだきこんだ得意先　狂二
猫の子の世話まで頼む得意先　牧人
坊ちゃんと馴染み得意先で親しまれ　紫香
御主人の浮気も得意先できゝ　牧人
得意先のポン〳〵抱いて泣かれたり　茶
得意先とったりとられたりしてくらし　一ン十
得意先ただやる様に置いて来る　潮花
うるさい得意先やと受話器おき　茶
得意先飲み屋にもって足を出し　一三夫
裏口へ廻った別な得意先　省三
小僧にも頭を下げる得意先　いさむ
得意先ポン〳〵いうて買うてくれ　茶
土砂降りにすぐ持って来いと得意先　豆秋
得意先女中の世話も頼まれる　幽王
銀行から暴れた落目の得意先　貞女
無理なこともやっぱり得意先　いさむ
得意先らしく貧屋のなれなれしい　一求
得意先嬉しい事のある電話　利武
留守かいなこ二度押してみる得意先　古方
得意先からの電話で叱言済み　水堂

季節一品料理
喜文鍋
割烹
花文
南区難波新地四ノ七
電話㊃一八七一

三べんに払ってくれても得意先　多久志
まァ呑めと古いなじみの得意先　晴峯
無理やけどマァそうしとけ得意先　柳宏子
サービスが足らぬか得意先がすねスクーターで百匁の味噌も得意先　没食子
ちょっとでもふけたら気のすむ得意先　乃文夫
段違いの野球をお得意さんとする　静馬
御得意でうっかりネタを喋らされ　水客
（YOU整理）　十悟

雑川 玉造支部句会（大阪市）

永田六竜子報

又しても掃いた座敷へ出す玩具　井平
茶の間兼座敷に金庫迄もすえ　梅志
奥座敷つぼのはずれた三味の音　貞句朗
女とは座敷の隅へ隅へ寄り　文秋
御座敷でたゝみのふちが邪魔になり　柳宏子
四帖半が座敷食堂応接間　風間
座敷とは名のみ中古の家具置場　一栄
鉄筋の中にもチャンとある座敷　清子
お茶目さん座敷で一人待って居り　登志子
お座敷を暗う閉めてる小鳥籠　稚美
三の糸切れて座敷のデッカンショ　六竜子
支払のすまぬ座敷で落ちつかず　白柳子
駈け引にかけたつもりが引っかかり　風間
大安売してゝも二割程儲け　雅美
駈け引の無いとこうとはじく玉　清子
駈け引と駈け引笑顔失わず　文秋
かけひき等御座いませんと負けて居る　六竜子
駈引としった笑顔に気がくじけ　梅志

雑川 淀川支部句会（大阪市）

木村水堂報

天国で結ぶと親をおどろかし　水堂
天国を信じ清貧一途なり　三十郎
水車取り残されたまま廻り　香林
人生の転機水車を見ていたり　清生
時勢には勝てず水車の悟り顔　礼司
ハイヒール長屋の噂気にかけず　旭蝶
買物は男に持たすハイヒール　東洋男
千羽鶴うごいて虫とたわむれる　若菜
虫しぐれ母は亡くとも故郷の味　花村
水車小屋今夜は誰の逢引ぞ　多久志
ハイヒール八頭身の夢続き　山舟
新築の自慢大工にまかせとき　山茶花
新築を噂の中で建て初め　水茶
京極をハイヒールで行く祇園の妓　文児

雑川 阿倍野支部句会（大阪市）

菊沢小松園選

見どころがあって一人前とは言わず　堰子
年寄の仕事口だけ一人前　喜仙
手拍子を残して三の糸が切れ　十悟
その割に秋の食堂混んでいず　一三夫
親切に教えて呉れる一人前　裸牛
飛田へも行って一人前になり　豆秋
早合点する親切を持てあまし　葉光
食慾に負けて晩飯高うつき　毅
子を寝かす座敷一人前を取り　白柳子
食慾はバンドゆるめてからこそ　恒明
口止めを渡し特二の人となり　文秋
喋る気になったは口止めされてから　梅里
拭いて上れと言わんばかりの大雑巾　樹峯
早がてんだん〳〵叱りようをかえ　梅志
酒が出て労資手拍子よく揃い　小松園

雑川 ハワイ支部句会（ハワイ）

内藤草一郎選

口紅の色まで恋の中に生き　鈴子
もう泣けない化粧してから胸で泣き　八丁堀
朝を出る女鏡に毬かめる　虹橋
嗜みの化粧ですよと盗り立てる　迷朗
寝る前の化粧は何を思えとか　銀水
母さんの化粧へ娘新知識　いつ生
義太夫の顔に壊れる厚化粧　拝山
厚化粧するのも二号の娘には娘なり　紀南児
終戦で変らぬ富士の雪化粧　風草
初対面見せたくもない化粧前　周防
化粧冴え騙されまいと騙される　旋風
まんざらでもないさ見直す妻の顔　エス子
今宵また騙す自信の厚化粧　砂丘
泣き止めば女澄して化粧する　柳葉
あの顔で女形になれば惚れ〳〵し　芳雨
老嬢の化粧よ淋し縹渺し　十吉
四五人の親とは見えぬ化粧振り　浪之助
たゞ一人に会うへ化粧なおさらし　笑有
嫌ですとからだひねって紅を引き　野舟
鏡が殖えて化粧を妻忘れ　北海
厚化粧どうでも二号見返す気　快夢起
内助は知らず化粧は上手なり　陽炎
その年へ鏡が嗤う程に塗り　草一郎

雑川 岡山支部句会（岡山市）

土井雷山報

怒っては負ける車掌の顔になり　久米雄
濁音の言えないボスに押えられ　葵邱
ボス或日易者の前へそっと立ち　七面山
専務車掌尻を探って剰りを出し　麦太楼
空威張りして勘定を払わされ　東岸子
スリッパを遂に脱がした背くらべ　廬鷹
母を抜き母へ挑んだ背くらべ　白竜
掘出しは民生委員からのボス　多賀雄
吉報が続く双子に驚かされ　紅風
踏切へ行きます恐い置手紙　秋月
マダムふとボスに刃向う恋を知り　正一
吉報であったに勤務まだ止まず　法院
吉報へ神経痛の腰が伸び　陽子
仲直り屋台に二つ並ぶ尻　義夫
背くらべ男に欲しい丈をもち　小僧
先生の肩へ甘えた背くらべ　竹生
仲直りいやがる方が金をもち　師星
吉報は死んだと思う子の帰国　娯句楽
御手数をかけたと家裁で仲直り　十九平
仲直り隣の前も水を撒き　鉄人
背くらべ負けても目方では負けず　吟平
乗越しえ車儲けた顔になり　三六
背くらべさせれば小供頸を出し　山三
用もない美人に車掌物を聴き　銀子
いつになく車掌が吃る女客　静香
踏切へふと失恋が足をとめ　絹代
墓口を空にして来た仲直り　幽谷
腹芸の出来ない小者の空威張り　心酔
霊柩車だけが踏切通り抜け　白水
踏切がよくてやっぱり貧乏し　さかえ
仲直りしてくさそうに月へ出る　守人
十代の恋背くらべしてさわぎ　美舟
流行服着たマネキンへ背をくらべ　操
仲直りして二階借り続けられ　抱月
踏切が悪うて一生追い抜かれ　夢外
仲直り先生癪を見て笑い　青二
踏切と知って小犬も立止り　苦楽
ボスと言う顔に似合った髭をつけ　哲郎

寄附帳の筆頭ボスの名が並び　旭景子
ボスが来て大きく笑う警察署　軒水
お互に取るものとれた仲直り　美笛
空威張りしたばかりに見放され　和久
事故つゞき魔の踏切と恐れられ　仁斉
方針もなく停年へ菊が咲き　流風
吉報を待っているよと励まされ　驚琴
ここからは特二車掌は胸を張り　五茶
背くらべ親越す頃から金が要り　白葉
吉報の前に菰樽すえておき　雅水
後からボスが糸引く言葉尻　日出雄
仲直りする気の蚊帳を早く吊り　雷山

川雑　廣島支部句会（広島市）

国弘半休報

どこだってお役に立つと牡蠣威張り　徹酔
破る気はないにつグンマして」と彼女　美文
斗病へ今日も希望を持直し　踏絵
洗面所で拾うた牡蠣を土産にし　十進
採用と決めてるように希望聞き　越舟
島国をテープで切って移民団　てるじ
かき舟で人目がこわい恋すすむ　紅児
卒業はしたが希望の職はなく　よしを
地元でも高嶺の花のはしり牡蠣　上利
混むバスで今日の仕事のプラン立て　季賛
子の希い親の望と食い違い　治義
約束を破る嘘とは知って聞き　半休

川雑　弓削支部句会（岡山県）

直原七面山選

月影へローマンチックな歩きぶり　満寿子
あばら屋にさす月影の詩情めき　只世
月影の白い浜辺にある旅愁　陽子
月影へ歌がつゞいているキャンプ　葵邨
小石ふと投げれば月の影が割れ　幽谷
月影を見事砕いた娘の身投げ　喜楽
月の影二人影絵の様にいる　青柿

美しくありたい来世へ眼をつむり　明美
美しい花へ接吻してる蝶　鼓草
盛り上る乳房きれいな夢を抱き　承平
頬紅をはき美しく女病む　鋲吉
命あるまでは虫の鳴きつゞけ　周甫
恋を呼ぶ虫の声して夢が覚め　たつよ
音絶えて馬草の中に虫が鳴き　喜久枝
逢曳の影を送って虫が鳴き　賤女
虫の音も入れて故郷から便り　笑雷
二号と云うやるせない身（引くルージュ　政人
やるせない日々へざくろがはじけてい　智恵美
寝返えれば尚やるせなき夜半の雨　千年
やるせなくたたむ詩集の重たさ　美舟
やるせなさ皮の手帖をくってみる　七面山

川雑　高知支部句会（高知市）

大西迷窓選

すだれ越し一家団らん楽しそう　三枝子
ウインドにマネキンはつこする姿態　勝喜
見え透いた言訳している千鳥足　松風
硝子越し彼女は何か言うたよな　光雄
ウインドの服見ただけの生活向き　守次郎
嘘でないことは貴方の目でわかり　梅林
前を行く脚はん頼りの山の霧　温夫
お芝居の好きな隠居に逆らわず　由紀子
千両と言うところで幕となり　善介
名優が飯を炊いてる小屋の朝　義生
猿芝居みかんが飛んでふっこわれ　寛
トンボ返り舞台の隅で忘れられ　智賀子
草芝居故郷へ遠く旅つゞく　直喜
紙芝居金の無い子は遠くいる　舟帆
金廻りいいのか芝居へ泣きに来る　巳
村芝居家の親父が内蔵之助　佐智子
風鈴の音も淋しい秋の風　葵邨
秋風に風鈴少し淋しすぎ　武
すゞ虫の歌に奏でる鈴の音　周治
一雨の来て風鈴も清く鳴り　実

風鈴も鳴らずに今宵寝つかれず　勝亀
風鈴へ不満の団扇振ってみる　蚊市
風鈴も鳴らず屋寝の場所を変え　海鳥
新妻のひざを枕に見る風鈴　常香
きりぎりす風鈴へ耳かたむける　素有
風鈴も鳴らず旦那も来ない夜　一周坊
二階にも病む人の風鈴が鳴る　蟠蛇
今日は鳴る風鈴へ今日は　竹比呂
風鈴のようなあなたであること言い　白秋
鈴風を何時まで吊るす男子寮　左千子
風鈴へ金で買えない風が吹き　俊一郎
風鈴へまぶしい朧をさけて立ち　汀
風鈴の短冊が落ち秋近し　蘇水
気に入らぬ風にも風鈴身をまかし　俊江
情熱の風はと風鈴受けて鳴り　迷窓

川雑　宇部支部句会（宇部市）

津秋六花選

思いきり朝寝がしたい子沢山　実男
温泉宿女中朝寝をたしかめる　天作
日曜日朝寝の夢を手にとられ　青水
寄宿舎の風鈴雨戸の外で鳴り　岩泉
高潮が陳情団をまたつくり　峰松
朝寝してふと空想にふけて見る　豊年
妻病んで風鈴師走の風となり　仏道
行水に庶民の味を深くすい　辰坊
ギリ〳〵の線で年増うまく逃げ　仙柳堂
妻の座にちっぴり欲しい年増ぶり　哲二
行水のタライで月を汲みこぼし　箔川
風鈴をつって間借りに夏が来る　六花

川雑　倉敷支部句会（倉敷市）

椙原一善選

肝心の顔引き立たぬネックレス　万吉
お店番ですのと娘かるく逃げ　谷水
満更じゃ無さそう席をはずすとき　春日
店番が美人で値切るのやめにする　五茶

父の居る内は机にかじりつき　一善
ネックレス母から離れて席を決め　千代春
店番が客に値段を教えられ　麗水
ネックレス父母をさげすむ娘に育ち　まり子
ネックレスクインになった気で歩き　笑雷
同席の女を皆にひやかされ　明心
お口惜しいでしょうと妻まで泣いてくれ　弥次郎
男とて涙はあるさと息をつき　銀子
電話でもすむ交渉へ出張し　流風
店番の寸暇彼氏のものを編み　承平
労基法など店番はまだ知らず　桂月
宴席は繊でと幹事如才なく　素夫
出張と云う名で予算消化され　天風
ネックレス模造真珠でうれしいか　鳳月
高齢に席をゆずって話し合う　素泉
あたゝまる間のない席を左遷され　道友
店番の美貌へ釣銭置きわすれ　万坊
机の児どの子が出世するのやら　狂風
男泣きくるりと向けた背がふるえ　飴ン坊
男泣きした純情は夢の夢　善坊
店番をためば宿題おもい出し　真奇
ネックレス模造真珠でうれしいか　鳳月
隣席の美人すげなく降りてゆき　隆文
あたゝまる間のない席を左遷され　道友

雑川 鳥取支部句会（鳥取市）

大西八歩報

アマチュアの道具刃こぼれしたまんま　湖山
小道具の位置がきまって木が入り　茗人
名コンビ前売券がよくさばけ　耕民
恋人が出来てコンビにひびが入り　三歩
道具箱ベンチを妻にくどう聞き　星影
夏中の無精が秋をあわてさす　淑恵
独り身の無精朝めしぬきで寝る　遊星
コンビ今日気が合わぬのかよくこちら　粗粒
あのコンビ一寸女が美人すぎ　昭夫
伸びきった健康水着を食いっかせ　辛生
美しい素足も交る涼み台　多可志
四十の思案無難な方にする　茗人
午後の陽の砂が素足を慌てさせ　日満
脱ぎ捨てゝ浜の素足をうれしがり　八歩

雑川 大聖寺支部句会（石川県）

野村味平報

手鍋へ彼女の箸もよく動き　酔羊
アパートの何処か牛鍋匂うて来　光郎
手鍋に心温まる友とあり　ひろし
切込みのことには触れず牛味平　生理とも言えず只頭痛ですとよ　停年が近い頭痛の種がふえ　照坊
呑み過ぎの頭痛を風邪にして休み　恒雄
口端を入れて頭痛の種せおい　昌男
通勤の車中クイズを持ち寄って　魯木
片言の子に道を聞く農繁期　久雄
又おいで温泉宿の鶏鳴言い　武富

雑川 京都支部句報（京都市）

田中烏雀報

無理にこっちむけた子供の目に涙　紫蘭
督促状配達夫まで恐い顔　季生
名門とか云うそんなマダム　豊次
情熱のさこそ耳輪のゆれやまず　司郎
零一直線に氷配達町曲る　尚平
酔うた手が抱みながらも又受ける　親生
御曹子が仲居のつりを受けこった　亀一
情熱の炎ゆる日炎ゆる曼珠沙華　鳥雀
情熱は孤島に渡り若き保姆　九角
手を握る情熱などが懐しく　晴芽
母病むとふみあった日の夕晴雨　治生

雑川 篠山支部句会（兵庫県）

小西無鬼雫

二次会の場所聞き違えて酔がまわり　輝雄
聞き違い早いお礼をしてしまい　ひか平
薄禿になってハンサム品がつき　千草
薄禿も伊達には禿げぬと負おしみ　初穂
丸禿の前で薄禿かしこまり　越山
薄禿へ櫛うらめしい髪をつけこゝまでにした番頭の髪うすし　偶倍
あきらめていて薄禿にある悲哀　無鬼
留守勝で生き難い世を共稼ぎ　梅枝
ヘップバーン息子は留守と断られよし子
居留守らし庭の手入れか鋏音　徒然
五万円夢みて留守を買って出る　一風
留守したろしたろと父はあてがあり　凡志
吉報が留守の隙間へ投げ込まれ　無聖
留守へ来てきたない家だなと思い　一両
村祭り心待ちする土産餅　はつゑ
当らぬと知りつゝクイズ心待ち　虚空洞
郵便料の不足もうれしい心待ち　左文字
十六になれば内気な嘘も云い　文平
ぬけぬけと一度見なさいシャツの紅　愉多可
月給の袋がいつも嘘云わせ　村雨

大阪逓信病院川柳会（大阪市）

橋本幸男報

羽織ぬぐ高座は潮時知っている　草右
ちと目立つお腹へ早い羽織着る　春巣
羽織の裏見せて踊ったかくし芸　竹荘
酔眼へ妻痛いとこ計り突き　凡平
ひがんでる子を先生によく頼み　幸男
あれ位持っているのに彼ヒガミ　方正
台風来担架の廬を払っとき　露児
担架置忘られたよう平和なり　ハナ子
担架演習今思出の敗け戦　よしを
事故現場担架に花が添えられし　夏生
試歩の眼に廊下の担架夢のよう　春雄
旅先で悲劇の一瞬担架で語る　正徳
ナース今日担架の重さ身にこたえ　康彦

333川柳会（堺市）

川村好郎報

女事務男に甘えるすべを知り　晴美
応待も紋切型の女事務万里
給仕ではありませんよと女事務千里
一寸の間惜しみ編んでる女事務　狂二
皮肉にも堪えて借りたい頭下げ　好郎
何もかも皮肉に取れる倦怠期　三休
台所の黒板借りのメモばかり　冗歩
白墨の字もかれ教師として老いる　高志
黒板で先生月給の計算し　貴山
黒板に教師相合傘で行く　梅里
女房も一杯飲もうという機嫌　南宗
町外れの街路樹虫のついたまゝ　一楽
街路樹を植えてもこわい裁判所　摩天郎
街路樹を植えて公約果した気　素男

帝化川柳会（大阪市）

佐野白水報

内職へ子も父ちゃんもほっかむり　好祐
内職の指は機械のよう動き　京一楼
内職をおもちゃにさせて手を急き　花車
宿題の不出来親父の学が知れ　九州男
宿題がアチャコの青春だけは聞き　雅堂
宿題は夏も終りの一夜漬け　登志晴
関取の野心ゆさぶる振れ太鼓　辰始
コップ酒友の野心をきいてやり　葉乙女
獄窓の隅で野心の夢を見る　一平
南極へ挑む野心の顔と顔　利武
閑職に廻り野心家もてあまし　白水

富柳会句会（富田林市）

阿部柳太報

亡くなった母の口癖今こたえ　栄一郎
口癖へ自分の事は棚にあげ　春吉
連休の宿直いつも土産付き　周一
恐妻も夫宿直の日はたよりなく　星女
宿直の朝寝坊徒がもう来てる　東雲楼
宿直の父とは知らず子はねだり　柳太
急行停車菊人形は今盛り　三次
中将姫の据ぬらしてる菊人形　紅梅
菊人形端役の衣裳は枯れたまゝ　好郎
鯛よりもさんまの方を子は好み　富太
さんま焼く煙の中の子沢山　歌都路

季節一品料理
江戸前にぎりずし
アベノ橋地下映画食通街
梅里の店
大萬

★大万川柳（第七十回）を募る
兼題「八頭身」　路郎先生選
締切・十二月十五日　句数五句以内
発表・十二月二十一日（店内掲示）
投句は　阿倍野区松崎町三丁目
一〇　大万川柳会宛

公・私・雑・記

★寒いと云っても大したことはないが、もう冬のオーバになった。歳末になると何かに気ぜわしくなる。年内に、新年号をもう一冊出さねばならぬので編集局はてんやわんやである★十月十日に尺八の中尾都山先生が亡くなられた。私がまだ高商の予科のころに先生の門をくぐったことがあるので、後年大阪府の文芸懇話会で席を同じくして大変なつかしく思っていたがとう〳〵亡くなられた。私が先生の門をくぐったころの先生は今橋の鴻池の向いに居られた。玄関で教授されていた。半紙に一々教えるだけの譜をスラ〳〵と書いて渡されたものである。音譜が刊行された以前のことである。★十一月四日の夜、日本橋北詰の観光ホテルで芦田秋窓氏の句集出版記念に招かれた。秋窓氏はもと秋双と号し、正岡子規直接の門下として大阪で生きのこりの唯一人である。明治三十七、八年ごろの川柳会には、月斗、秋双、鬼史、圭岳、素石などという子規門の錚々たる連中も顔出しをしていたものである。私たちも俳句の会へも出ていたが俳柳ともに盛んになるにつれ別々の道を歩くようになったのである。その昔、秋双氏は平野町四丁目で私は淡路町三丁目で、一つ隣りの町に住んでいたのである。★十一月二十五日に四天王寺の太子堂前で生田花朝女史のお父さんの生田南水翁の句碑の除幕式が盛大に行われた。南水翁は明治大正期の大阪文化に貢献された方で、俳人としても有名であった。蔑乃の父の河盛蘆村翁などもその門に遊んでいた。私はケイガイに接したことはないが花朝女史とは道頓堀にバノンがあったころのお馴染みである。女史は閨秀画家として知られているが、句も又巧みで秋の空のように澄み切っているのに作家訪問記を二十ヶ月書き続けた潮花君を、女流作家だと思っている方が非常に多いので、そのタネ明しのためでもあるし、又訪問記の締めくくりとしてもいいだろうというので潮花君をよく知る人たちによって催したのである。★川柳家の廿四時は諸大家の生活ぶりを手にとるように知ることが出来て大変興趣が深い。来年もこの稿は連載することになっているのでアンケートを受取られた方々は御協力が願いたい。★記事フクソウで、雑筆がのせきれなかったが、本号で漸くそれらの発表が出来た。今後も出来るだけ、いい原稿、面白い原稿を寄せていただきたい。★十一月二十四日に、諏訪の森の中島生々庵医博の新居で、不朽洞会の理事総会を開いた。小松市の茶仏氏、米子市の美笑氏、篠山の無鬼氏なども顔を出してくれ、八ミリなどを撮って和やかな集りであった。詳しいことは何れ次号で発表する。★恒例による柳人交歓の年賀広告を続々と申込まれたことをあつくお礼を申上げる。御厚意を無にしないように一段と内容の充実を期している。まだ申込まれていない方々は大至急お願いする。★ではよい年を迎えられたい。（路）

柳人交歓年賀広告を募る

新春号へ貴方の年賀広告を

★一ト口金二百円。幾口でも申込んで下さい一ト口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います一ト口分は五分の一段組三行。

★原稿締切は十二月五日着便

★広告料は前金のこと（郵券代用でもよろしい）

川柳雑誌社

敬服させられている★「潮花を語る」という座談会を蔑乃、梨里、良子の三人と私とでやった。女流

募集

課題吟募集

ベル（廿句以内）小川恒明選
トンネル（廿句以内）田中烏雀選
紙屑（廿句以内）清水白柳子選
見送り（廿句以内）小西無鬼選
（十二月二十日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句以内）麻生路郎選
川柳塔（雑詠）北川春巣選
文章（評論・研究・感想其他）麻生路郎選
（毎月二十日締切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▲『課題吟』は誰でも投句が出来る。
▼『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

printed in Japan

B列5号　毎月一回一日発行

川柳雑誌　第十一巻第十二号

定価　五〇円（送料四円）

（載転禁）

半ヶ年　三二四円
一ヶ年　六〇〇円

昭和三十一年十一月廿五日印刷
昭和三十一年十二月一日発行

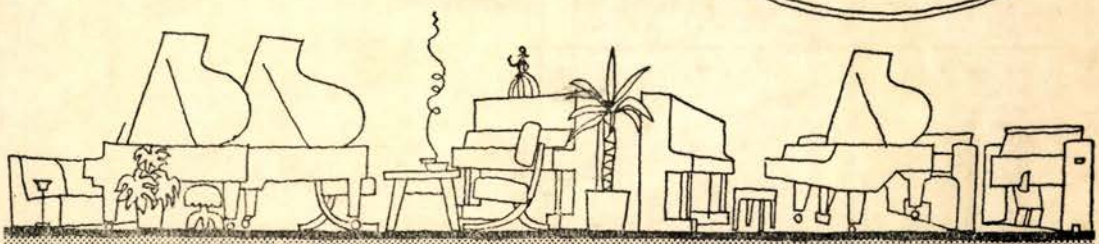
大阪市住吉区内代西五丁目二五番地
編集兼発行人　麻生幸二郎
大阪市住吉区内代西五丁目二五番地
印刷人

発行所　川柳雑誌社
電話　大阪㊤六〇八一
振替口座　大阪七五〇五〇

山葉ピアノ

山葉オルガン

家　具



まいどありがとうございます

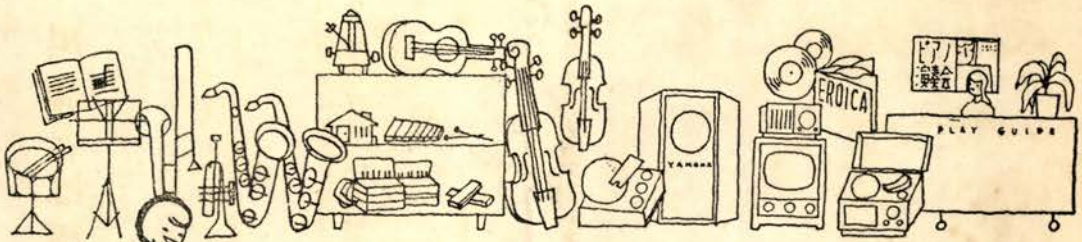
楽　器

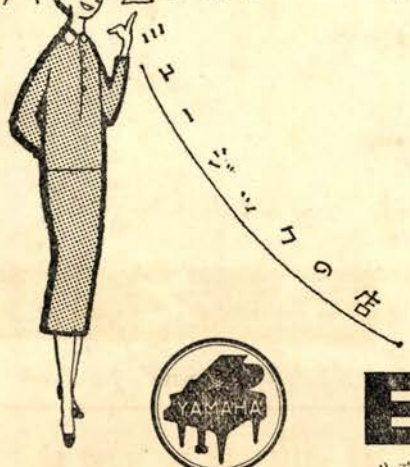
電蓄・プレヤー

レコード

テレビ ラジオ

楽譜・音楽書籍





ピアノ¥140,000より　オルガン¥15,000より

YAMAHA

日本楽器

心斎橋筋二丁目　TEL(75)5950・5956～9

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）　昭和一年十月廿五日第三種郵便物認可　昭和一年一月二十日　一冊　和昭・本刊第四日

THE SENRYU ZASSHI

NO・355

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

不眠の昼間療法！

☆昼はすっきり…！
焦燥感、不安感がとれ
頭脳明セキ、能率は増進
☆夜はぐっすり！
昼間の服用だけで、催
眠剤なしに安眠できる。

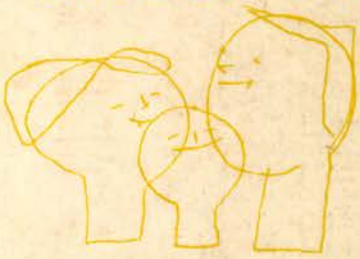
神経症治療剤

ノクタン

山之内

東京・大阪　山之内製薬株式会社　福岡・札幌

一家そろつてホーライ党



廣東料理

蓬莱

大阪なんば・TEL ㊹551—2

お嫁入ふとん

原綿から綿も打つ
生地も織る
布団の仕立まで
製造専門店で
良い品を安く！

◎布団の生地は何千反でも揃う
◎大阪府下どんな山奥でも無料配達します

伊賀屋製線株式会社
伊賀屋ふとん部

天王寺駅（阿倍野駅）前スグ北半丁
電話㊐8276　工場㊐7823

麻生路郎先生著

川柳とは何か

—川柳の作り方と味い方—

価　二五〇円
送　三二円

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的であるその川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所　川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区払方町27　振替東京29507

第三五五號　川柳雑誌　定價五拾圓　送料四円